平成 28 年度（公財団）おきぎんふるさと振興基金報告書
〈環境部門〉

「バードウォチングを通した環境教育と地域活性化」

名桜大学国際学群新垣研究室
2017 年 3 月

〈目　次〉

■はじめに（1）
①アジサシ類・バードウォチング in 恩納村（2）
②“やんばる”早朝バードウォチング・バスツアー（4）
③シンポジウム「バードウォチングとエコツーリズムⅠ～地域活性化と観光促進～」（7）
④“湿地・冬鳥”バードウォチング・バスツアー（9）
⑤シンポジウム「バードウォチングとエコツーリズムⅡ～バードウォチング施設について考える～」（11）
■まとめ・課題（13）
■謝辞（14）

■資料①（冊子）
●アジサシ類・バードウォチング in 恩納村
●“やんばる”早朝バードウォチング・バスツアー
●シンポジウム「バードウォチングとエコツーリズムⅠ～地域活性化と観光促進～」
●“湿地・冬鳥”バードウォチング・バスツアー
●シンポジウム「バードウォチングとエコツーリズムⅡ～バードウォチング施設について考える～」
■資料②（チラシ・ポスター）
■資料③（新聞等）

■はじめに

沖縄県では、500 種の鳥類が記録されている（2014 年現在）。沖縄の鳥類相の 90%は渡り鳥等の外来鳥類であり、また、日本の鳥類の約 75%を沖縄で観察することができると言われている。一方、ヤンバルクイナ、ノグチゲラ、アカヒゲ等の固有種が多いのも沖縄の特徴である。これらは、沖縄の地理的なポジションに起因する亜熱帯海洋性気候、島嶼性、また、生物地理学上の区分である東洋区と旧北区の境が琉球列島上に存在することに起因する。

このように、沖縄は日本でも極めてバードウォッチングに適した地域であると言える。また、ヤンバルクイナやノグチゲラ、アカヒゲ等の固有種を求めて、バードウォチャーが最も訪れてみたい地域の一つでもある。しかし、一方で、地域でのバードウォチングの取組は活発とは言い難い現状にある。

沖縄で見ることができる鳥類は、沖縄の自然環境的な特徴に起因する。すなわち、バードウォチングは、必然的に沖縄の自然環境の特徴を知ることを意味する。また、沖縄で観察される野鳥の 90%は渡り鳥等の外来鳥類であることは、バードウォチングを通して、沖縄と県外（海外も含む）との関わりで捉えることができ、自然環境を地球規模で捉える機会にもなる。

県内でのバードウォチング大会及びこれに関連するシンポジウムを開催することは、地域の野鳥に対する関心を高め、自然環境の保護を地球的な規模で考え、地域での環境保全の取組みを考える機会とすることができると考える。アジア諸国（特に東南アジア）における、バードウォチングの取組は非常に盛んであり、一方で、近年急増している沖縄へ来る外国人観光客の多くは、台湾・香港・韓国等のアジア諸国からであることより、沖縄におけるバードウォチングの取組は、今後の沖縄観光の観点からも重要であり、来年、世界自然遺産への登録の可能性の高い「やんばる」地域（国頭村・大宜味村・東村）においては、特に重要性であると考える。

それで、本取組においては、これら上述のことを考えながら、地元におけるバードウォチングの普及啓発を図ることを目的として、バードウォチング（3 回）及びこれに関するシンポジウム（2 回）を開催した。

①アジサシ類・バードウォチング in 恩納村

日時：平成 28 年 7 月 30 日（土）08：00～12：00

場所：恩納村瀬良垣漁港及び周辺、大宜味村平南の海岸

参加者：10 人

■開催目的

アジサシ類は、4 月から 8 月にかけて沖縄に渡ってくる夏鳥でカモメの仲間である。沖縄ではベニアジサシ、エリグロアジサシ、コアジサシ等を見ることができる。これらアジサシ類は、遠くオーストラリアから産卵・子育てのために沖縄まで飛来するもので、沿岸で群れ飛び、ダイビングをしては小魚を捕まえる姿は沖縄の夏の風物詩の一つである。

今回、このアジサシ類のバードウォチングを開催し、アジサシ類の特徴、沖縄の自然的な特徴等について理解を深め、アジサシ類の保護について考える機会とした。

■概　要

嵩原健二氏（沖縄野鳥研究会）をガイドとして、朝 8 時に恩納村瀬良垣漁港へ現地集合をしてバードウォチングを開催した。漁港の北西側には、自然岩礁と防波の為の大型人工岩礁があり、これら岩礁域は例年エリグロアジサシやベニアジサシの営巣地となっている。昨年（平成 27 年）の夏には、多くのベニアジサが繁殖していたことより、今回、この場所でバードウォチングを開催した。しかし、今回、エリグロアジサシが主でベニアジサイは非常に少なかった。

バードウォチングの開始に際し、嵩原氏から予め作成した冊子を用い、また、自前のパネルを使いながら、沖縄に飛来するアジサシ類や見分け方のポイント、繁殖行動等についての説明をして頂いた。その後は、双眼鏡やスコープ、カメラを通し、岩礁のアジサシ類を観察した。岩の窪みでじっとして動かない個体は抱卵中と思われ、また、子育ての最中なのか餌を運んでくる個体も見られた。また、カラー足環（右足青色）が装着された個体も見ることができた。鳥類の足環は、寿命や移動距離等の鳥類生態に関する情報を得る為のもので、国際的に行われている手法である。これにより、どの地域から沖縄へ飛来したのか等の情報を得ることができる。

しばらく漁港で観察した後に、ベニアジサシを多く見ることのできる海岸（漁港から 500 メートル程西側）へ移動して観察をした。岩礁まで離れてはいたが、多くのベニアジサシを観察することができた。その後、大宜味村平南海岸の岩礁の見える場所へ移動した。ここでは、セグロアジサシを多く見ることができた。親鳥だけでなく、今年ふ化をした若鳥も見ることができた。

今回、10 人（主催者を含む）が、バードウォチングに参加した。参加者全員から「良かった」との評価を頂いた。また、このようなイベントを今後も実施して欲しいのとの要望もあった。

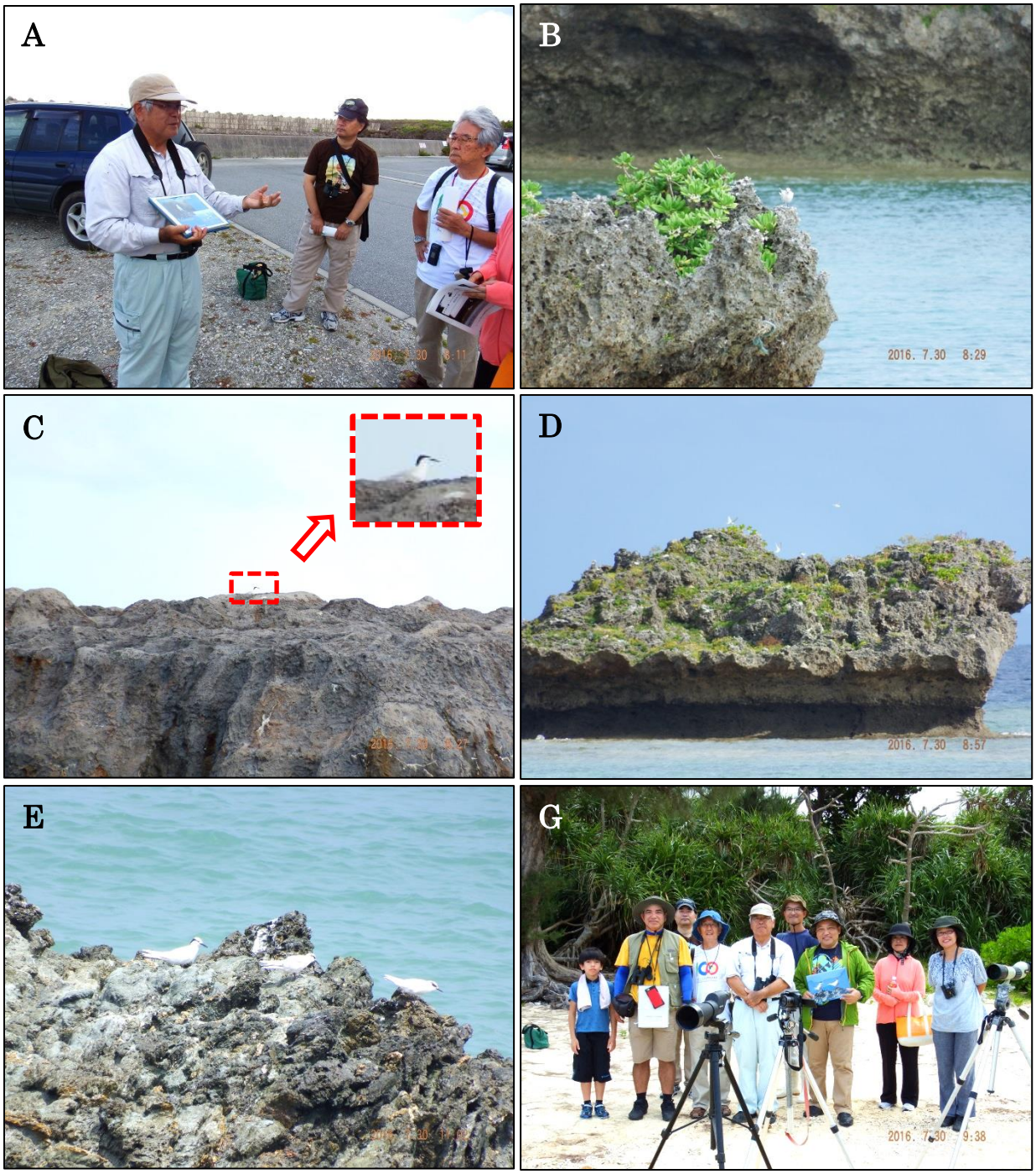


図１　アジサシ類・バードウォチング in 恩納村

A, アジサシ類についての説明をする嵩原氏（左）（瀬良垣漁港）; B, 岩礁上のセグロアジサシ：カラー足環装着個体（瀬良垣漁港）; C, 人工岩礁で羽を休めるベニアジサシ（瀬良垣漁港）; D, 遠く離れた岩礁に群れるベニアジサシ（瀬良垣海岸）; E, エリグロアジサシの親鳥（左）と若鳥（右の 2 個体）（大宜味村平南海岸）; G, 記念撮影（瀬良垣海岸）

②“やんばる”早朝バードウォチング・バスツアー

日時：平成 28 年 9 月 24 日（土）05：00～14：00

場所：国頭村（安波ダム周辺、「やんばる学びの森」）、大宜味村（喜如嘉ターブックワ）等

参加者：19 人

■開催目的

“やんばる”には、そこにしかいない生き物（固有種）が多数生息している。鳥類としては、ヤンバルクイナ・ノグチゲラ・アカヒゲ等が挙げられる。野鳥は早朝に採餌等で活発に活動するのが一般的である。ヤンバルクイナは、日の出前の未だ薄暗い頃にねぐらの樹上から地面へ降りて採餌活動を始める。この早朝の１時間以内が最も活動的で、路上でも採餌活動をし、最も目撃しやすいタイミングである。

このツアーでは、生き物が活発に動き回る早朝に“やんばる”の森で野鳥観察等による、“やんばる”Only One 体験を通し“やんばる”自然について考える機会とした。

■概　要

未だ暗い早朝の 5 時に名桜大学から名桜大学のマイクロバスで国頭村へ向けて出発した。途中、為又バス停でも参加者を乗車さて目的地へ向かった。今回、19 人（主催者含む）が参加した。午後のシンポジウムで登壇して頂く江崎保雄男氏（兵庫県立大学大学院教授）にも、この早朝バードウォチングに参加して頂いた。

予定では、国頭村楚洲へ向かうことになっていたが、ガイドの嵩原氏（沖縄野鳥研究会）の判断で、国頭村与那から県道 2 号線へ入り「やんばる学びの森」への進入道路から「安波ダム」、安波集落、県道 70 号線沿いを北上し、安田集落、伊部集落をマイクロバスで移動しながら、ヤンバルクイナを探して回った。今回、ヤンバルクイナが見られたのは、伊部集落の民家傍の畑での１個体だけであった。1、2 年前には、沖縄島北部東側の県道 70 号線沿いに県道 2 号線の交差点から楚洲集落間の約 10km の間で、10 個体以上を観察できることも少なくなかった。しかし、ノイヌ（野良犬）により、ヤンバルクイナが捕食され、個体数が激減していることが指摘されている。伊部集落民家の畑に現れた個体は、バスの周りで採餌していたので、バスの中からではあるが近距離で観察をすることできた。

8 時頃から 30 分程度、「やんばる学びの森」で休憩をとり、また、朝食も摂った。その後は、同施設の管理するトレイルの一つである「ヤマシシコース」（イノシシ・コースの意）を散策しながら、森林性の鳥類の観察や「やんばる」の動植物の観察を嵩原氏の案内で行った。「ヤマシシコース」には、両生類等の生き物が集まる「水たまり」や樹冠が観察できる高床の木道等があり、「やんばる」の森を立体的に観察できるような工夫がなされている。木道や階段が設置され、適切に管理されているので子供でも歩きやすいようになっている。トレイルでは、１時間程度をかけて観察を行った。

10 時頃に、「ヤンバルクイナ・シェルター」と「ヤンバルクイナ生態展示施設」が隣接する「クイナパークゴルフ場」へ行った。「ヤンバルクイナ・シェルター」を目前にして、

建設の目的や経緯について説明をした。この施設は、やんばるの奥地（安田集落周辺等）でもマングースが頻繁に見られるようになり、ヤンバルクイナの絶滅すのではないかと危惧された 2006 年に、ヤンバルクイナを守る為に国頭村が独自で建設した施設である。「ヤンバルクイナ生態展示施設」では、飼育されているヤンバルクイナを 1 時間程度観察した。この施設は、2013 年の 9 月に開所した施設で、ヤンバルクイナ保護の普及啓発を主な目的としている。特に、これまで頻繁に自然のヤンバルクイナが現れていた県道 70 号線沿いで観察しにくい現状からすると、誰でもいつでもヤンバルクイナを見ることができるこのような施設の存在は重要である。今回は、野外でもヤンバルクイナを見ることが出来たのであるが、それでも、施設で飼育されているヤンバルクイナを見た参加者の満足度は高かった。

その後、国頭村道の駅（ゆいゆい）で早めの昼食を摂り、大宜味村喜如嘉の水田地帯（ターブックワ）で、シギ類やチドリ類等の冬鳥を観察した。この場所は、喜如嘉小学校が継続的に野鳥観察をしている場所であり、また、一般のバードウォチヤーも探鳥を目的として頻繁に訪れている場所でもある。予定通り 14 時には、大学へ帰着しツアーを終了した。参加者に「良い」との評価をして頂いた。良かったところとしては、「ヤンバルクイナを観察できた」ことを挙げていた。

図 2　“やんばる”早朝バードウォチング・バスツアー

A, 早朝の出発の様子（名桜大学バス停）; B, 野生のヤンバルクイナ（国頭村伊部）; C, 野生のヤンバルクイナ（国頭村伊部）; D,「やんばる学びの森」のトレイル（国頭村安波）

図 3　“やんばる”早朝バードウォチング・バスツアー

A,「やんばる学びの森」のトレイル：移入種のギンネムについて解説をする（国頭村安波）；B,「やんばる学びの森」のトレイル（国頭村安波）；C,「やんばる学びの森」のトレイル：二次林の松林（国頭村安波）；D,「ヤンバルクイナ生態展示施設」のヤンバルクイナ；E, ターブックワでの野鳥観察（大宜味村喜如嘉）；F, ターブックワでの野鳥観察：中央に野鳥がいる（大宜味村喜如嘉）　※図 2 の続き

③シンポジウム「バードウォチングとエコツーリズムⅠ～地域活性化と観光促進～」

日時：平成 28 年 9 月 24 日（土）16：00～18：30

場所：名桜大学学生会館（サクラウム）3 階大講義室 B

参加者：20 人

■開催目的

本シンポジウムでは、県内外から野鳥関連の調査研究やバードウォチング等の活動を先導している方々を講演者として招請し、それら地域におけるバードウォチングやエコツーリズムの現状やこれらをテーマとしての地域活性化や地域の観光促進等についての議論して頂き、本県における地域活性化や観光の方向性について考える機会とした。

■概　要

本シンポジウムでは、江崎保男氏（兵庫県立大学大学院教授）に基調講演として「コウノトリの野生復帰と生物多様性保全」のテーマでコウノトリの現状、今後の課題と保護へ向けての考え方（戦略）について講演をして頂いた。日本のコウノトリは、1970 年代には絶滅してしまった鳥類であるが、2006 年から人工繁殖が始まり、自然復帰の試みがなされ、2016 年現在 90 羽が野外で生息している。人工繁殖と野生復帰の試みの研究をと通し、コウノトリの生態学的な特徴が明らかになってきている。特徴の一つとして、地域個体群の上限（地域キャパシティー）が存在し、それが故に自然復帰個体を増やすには一地域での取り組みでだけでなく全国的な取組が必要であり、官民学連携でコウノトリの生息地整備を進めることが必要とのことであった。本県の野鳥の保護（ヤンバルクイナやノグチゲラ等の固有種も含め）においても、官民学連携の観点は非常に重要な示唆であった。

パネルデッカションとして、地域での取組として３人の方々に話題提供をして頂いた。先ず、村田尚史氏（名護市博物館学芸員）には、「名護におけるアカハラダカ・サシバの渡り調査について」のテーマで話題提供をして頂いた。名護市博物館では、2008 年から琉球列島を南下するアカハラダカ個体のカウントを行っている。この活動は、博物館の年間活動して、一般市民に名護市の自然環境について興味・関心を持ってもらう為の普及啓発活動の位置づけで行っている。ここ数年は、アカハラダカに加え、同じく琉球列島を南下し熱帯域へ渡りをするサシバのカウントも行っている。これら活動を通し、ここ 10 年近くの渡りの情報が蓄積され、渡りの傾向について述べることが出来るようになってきている。現状の課題としては、アカハラダカやサシバの調査に関わる人員が少なく、十分な調査が出来ていないとのことである。この為にも一般市民の野鳥への関心を高めることは重要であるとのことであった。

渡久地豊氏（国指定屋我地鳥獣保護区管理員）には、「ニュージーランドを訪ねて思ったこと・・・」とのテーマで話題提供をして頂いた。渡久地氏には、研究協力者としてニュージーランドの野鳥視察へ動向した時に行ったバードウォチングとニュージーランドの国立公園のビジターセンターを訪問した時の展示の工夫、バードウォチングの環境整備（目

隠しの設置等）について話題提供をして頂いた。展示の工夫としは、野鳥の保護は当然のことであるが、バードウォチングの普及啓発として、書籍や関連商品が多様で、バードウォチングのアマチュアから専門家、また、一般の観光客にも興味を惹くような工夫があったとのことである。ヤンバルクイナの保護の取組は、先行事例として取り上げることは出来るが、一般の観光客や探鳥家の興味を惹く工夫（野鳥観察施設、図鑑、関連商品等）については、未だ不十分とのころがあり、この取組はエコツーリズムの促進においても有効であると提案をして頂いた。

最後に、新垣裕治氏（名桜大学国際学群教授）には、「アジア地域におけるバードウォチング・イベント」とのテーマで話題提供をして頂いた。新垣氏は、ここ数年東南アジア地域で開催されている、Asian Bird Fair（ABF）への参加経験を通し、東南アジア地域（国々）におけるバードウォチングの現状について報告をして頂いた。東南アジア地域では、バードウォチング関連のイベントがいろいろと行われ、バードウォチングが非常に盛んであること、バードウォチングの取組だけなく、環境教育・環境保全を含めたエコツーリズムとして取組まれていることが報告された。

「総合討論」では、コーディネーターを小林政文氏（がじゅまる自然学校代表）が務め、基調講演及びパネリストの話題提供を含めた全体的な質疑が行われた。野鳥が生息できる環境を守る為の工夫として、基調講演で江崎氏が述べた、官民学連携のモデルを主な内容として議論が展開した。野鳥の保護や保全はそれだけが独立して行わるもので無く、地域との連携（経済活動、環境教育等）で行わることにより持続可能となるとのことが議論された。

閉会の挨拶として、新垣氏が今回のシンポジウム開催の目的について言及し、シンポジウム参加者及び講演者への感謝を述べ、シンポジウムを締め括った。

シンポジウム終了後に、名護市市街地の居酒屋で講演者、運営スタッフにより、慰労会が行われた。いろいろな情報交換が行われ有意義な慰労会となった。

図４　シンポジウム「バードウォチングとエコツーリズムⅠ～地域活性化と観光促進～」
左：江崎氏の基調講演の様子；右：村田氏の講演の様子

④“湿地・冬鳥”バードウォチング・バスツアー

日時：平成 28 年 12 月 18 日（日）08：30－13：00

場所：金武町（億首川水田地帯）、うるま市（照間水田/海岸/海中道路周辺・倉敷ダム）等

参加者：19 人

■開催目的

沖縄では冬に多く野鳥を観察することができる。その多くは冬季の渡鳥である。湿地や干潟に行けば、シギ・チドリ、サギ類等を多く見ることができる。冬季のバードウォチングを通し、野鳥への理解を深め“やんばる”と沖縄の自然の魅力について考える機会とした。

■概　要

8：30 に名桜大学から名桜大学のマイクロバスで金武町へ向けて出発した。途中の為又バス停と名護市十字路に寄り、参加者を乗車さて目的地へ向かった。今回、19 人（主催者含む）が参加した。翌日のシンポジウムで登壇して頂く Gawin Chutima 氏（タイ鳥類保護協会）と青木雄司氏（（公財）神奈川県立公園協会）も、このバードウォチングに参加して頂いた。また、バードウォチングガイドとして、嵩原健二氏（沖縄野鳥研究会）及び渡久地豊氏（国指定屋我地鳥獣保護区管理員）が参加した。

高速を使い、金武町億首川河口近くにある「ネイチャーみらい館」まで移動した。同施設にイクロバスを駐車し、徒歩で周辺の水田（タイモ畑）や川でバードウォチングを行った。ガイドの嵩原氏と渡久地氏には、この地域で見る事できる鳥類とその特徴、水田やマングローブ干潟等の環境としての特徴について解説をして頂いた。観察できた鳥類の種名（和名と英語名）と特徴について詳しく解説をして頂いた。アオアシシギ、コチドリ、セイタカシギやサギ類等が観察できた。同じく金武町であるが、億首川から西側に丘を越えた並里地区にある水田地帯へバスで移動しバードウォチングを行った。この場所は水田地帯の中央を南東側に流れる水路で、多くのシギ・チドリ類やバン等を観察することがでる。今回は、これらに加え、稀な鳥類としてマガンとヒシクイを水田で観察できた。

次に、うるま市の照間へ移動をした。照間では、水田（イグサを栽培）と海岸でバードウォチングを行った。水田には数日前に希少種のセイタカソリハシシギが飛来しているとのことであったが、今回、幸運にもこの鳥類も観察することができた。参加者全員に非常に喜んで貰えた。

昼食後に、うるま市の倉敷ダムへ移動し、冬季にダムに飛来する鳥類の観察を行った。カモ類を観察できることを期待していたが、湖面を泳いでいるのは殆どオオバンであった。ガイドの嵩原氏によれば、ここ数年冬季に非常に多く飛来するとのことである。しばらく観察を行い、予定の 15 時に大学へ帰着し、ツアーを終了した。

図５　湿地・冬鳥バードウォチング・バスツアー

A，野鳥の解説：渡久地氏（左）と嵩原氏（左から２人目）（金武町水田）；B，アオアシシギ（億首川河口）；C，水路で採餌する鳥類を観察する参加者（金武町並里地区水田地帯）；D，水田で採餌するマガン（手前中央）とヒシクイ（背後の３羽、黒い嘴）；E，水田で採餌するセイタカシギ（うるま市照間地区）；F，群れるオオバン（沖縄市倉敷ダム）

⑤シンポジウム「バードウォチングとエコツーリズムⅡ～バードウォチング施設について考える～」

日時：平成 28 年 12 月 19 日（月）17：00～19：30

場所：名桜大学学生会館（サクラウム）3 階大講義室 B

参加者：20 人

■開催目的

本シンポジウムでは、シンポジウムの第 2 回目として、バードウォチング施設整備の観点から、バードウォチングの促進について考えることを論点として開催した。県内外及び海外からバードウォチングの専門家を招聘し、それぞれの地域のバードウォチング施設や整備状況、利用の現状等につて話題提供をして頂き、バードウォチングやエコツーリズムを通しての地域活性化や観光の方向性について考える機会とした。

■概　要

先ず、Gawin Chutima氏（タイ鳥類保護協会等）に「タイにおけるバードウォチング施設」とのテーマで報告して頂いた。講演の通訳は新垣氏が行った。タイにおけるバードウォチングは、1962 年に外国人により設立されたBangkok Bird Clubに始まり、徐々にタイ人の間でも広まり、野鳥保護の必要性についても一般的に認識されるようになった。1993年には、タイ鳥類保護協会が設立され野鳥保護や環境教育・研究等が行われ、自然環境保全及び野鳥保護が促進されている。タイにおけるバードウォチング施設の発展は、1990年代後半に国立公園等で開始されている。鳥類専用とのことではないが、野生生物観察用のタワーが国立公園内に建設されている。2007 年にタイ湾の南側に開設した、Bangpu Nature Education Centerは、官民及び国際団体との連携モデルとしても注目を集めている。世界的に評価が高い施設としては、猛禽類の渡りを観察できるChumporn Raptor Centerがある。

青木雄司氏（（公財）神奈川県公園協会）は、「ネイチャーセンターとバードウォッチャーとの連携」とのテーマで、神奈川県立宮ヶ瀬ビジターセンターにおける施設整備や利用現状等について話題提供をして頂いた。宮ヶ瀬ビジターセンターは、山間部のダム建設によってできた人造湖のほとりに建設され、四季を通じて山野の鳥や水辺の鳥が数多く見られるようになり、関東でも有数の野鳥観察の場所として知られるようになった。その経緯としては、ビジターセンターの職員や専門家により、鳥類調査がなされ、鳥類データとして一般に公表されたこと、探鳥家との連携として、探鳥家から鳥類の情報提供をして頂き、センター内での展示や鳥類相の調査にも活用したことによる。しかし、現状の課題としては、探鳥家内だけで情報が共有され、ビジターセンターまで届かなくなっていること、利用者が増えたことによるゴミの増加、野鳥撮影の為の餌付けや撮影により鳥類の繁殖に悪影響等が出始めているとのことである。

神田君夫氏（やんばる自然写真工房）は、「沖縄の探鳥地施設の現状、海外・国内有名探鳥地との比較」とのテーマで、自身のこれまでのバードウォチング経験から、海外（コ

スタリカ、オーストラリア、南アフリカ）、県外（北海道、大阪、石川）及び県内（漫湖、三角池等）について、観察できる代表的な鳥類を示しながらそれぞれの施設の紹介をして頂いた。コスタリカのモンテベルデ保護区では、探鳥家の憧れの鳥であるケツアールの観察、保護区の管理と運営や探鳥家への対応等について話して頂いた。オーストラリアでは、カカドゥ国立公園のバードウォッチング施設や観察できる鳥類、施設管理に関することを話して頂いた。以下、南アフリカのクルーガー国立公園、北海道根室の野鳥観察舎、大阪南港野鳥園、石川県の河北潟、片野鴨池、沖縄県では、漫湖・水鳥湿地センター、比屋根湿地、泡瀬及び“やんばる”における野鳥観察の施設や鳥類、現状や課題について広く提言をして頂いた。

「総合討論」では、新垣氏（名桜大学国際学群教授）がコーディネーターを務め、上記の 3 者をパネリストとして進行した。先ずは、フロアーからそれぞれの講演者への質問を受け、その後は今回の発表を受けて沖縄県におけるバードウォチング施設の現状の情報共有及び今後の課題（要望も含む）についての情報共有が行われた。

閉会の挨拶として、嵩原健二氏（沖縄野鳥研究会）に、個々講演者の丁寧な公評をして頂き、シンポジウムを締め括った。

シンポジウム終了後に、名護市市街地の居酒屋で講演者、運営スタッフにより、慰労会が行われた。いろいろな情報交換が行われ有意義な慰労会となった。

図６　「バードウォチングとエコツーリズムⅡ～バードウォチング施設について考える～」
A, Gawin 氏の講演；B, 青木氏の講演；C, 神田氏の講演；D, 講演者と関係者の記念撮影：左から、神田氏、青木氏、Gawin 氏、嵩原氏、新垣氏

■まとめ・課題

今回、3 回のバードウォチング（「アジサシ類・バードウォチング in 恩納村」「“やんばる”早朝バードウォチング・バスツアー」「“湿地・冬鳥”バードウォチング・バスツアー」）と 2 回のシンポジウム（「バードウォチングとエコツーリズムⅠ～地域活性化と観光促進～」「バードウォチングとエコツーリズムⅡ～バードウォチング施設について考える～」）を開催することができた。

バードウォチングでは、夏季の渡鳥であるアジサシ類、在来種としてヤンバルクイナ等の固有種、また、シギ・チドリ類やカモ類等の冬季の渡鳥の観察を試み、沖縄の鳥類相を網羅的に捉えることが出来るような工夫をした。沖縄県では 500 種の鳥類が記録されている（2014 年現在）、内 90%が外来の鳥類（渡鳥や迷鳥等）でああり、日本の全鳥類の約 75%を沖縄県で観察することが出来ることについては、前述の通りである。これは、沖縄の地理的なポジションに起因する気候（亜熱帯海洋性気候）、島嶼性、また、生物地理学上の区分である東洋区と旧北区の境が琉球列島上にあることにとよる。バードウォチングは、これら自然環境に支えられた活動であり、バードウォチングにより沖縄の自然環境を実感することができ、また、渡鳥等の外来鳥類を観察することにより、県外や海外等、広く言えば地球全体の環境の現状に考えを巡らすこともできる。今回のバードウォチングでは、これらのことについて経験を通し理解をすることができたと思う。参加者は、バードウォチングを行った経験から無意識に、沖縄の環境の特殊性を感じることができたと思う。満足度としても非常に高かった。

シンポジウムは、「バードウォチングとエコツーリズム」とのテーマの下、2 回のシンポジウムを開催した。サブテーマとして、「地域活性化」「観光促進」「バードウォチング施設」を設定し、沖縄の直面する今日的な切り口で課題を提示した。参加者からの満足度は高かったが、参加者が少なく、一般に訴える内容として、また、開催のタイミング、周知手段等については次回へ向けての検討課題である。参加者が少ないことにつては、バードウォチングについても、同様で、これについても同上のことを検討する必要がある。

今回、実践としてバードウォチングとシンポジウムを組合せて実施してきた。バードウォチングとは何かを知ってもらうこと、鳥類のへ興味を喚起するために、先ずは、バードウォチングの開催が重要であり、今後も出来るだけ頻繁に開催することにより、一般への周知と関心を高めることが可能になると思う。また、より注目度の高いイベント（バード・フェアー等）の開催についても検討し、鳥類やバードウォチング全般についての知名度を高める必要があるとも感じている。今後、今回のシンポジウムのサブテーマとして挙げた、バードウォチングによる「地域活性化」と「観光促進」、「バードウォチング施設」の検討や設置に繋がる環境ができることを期待したい。

■謝　辞

今回、3 回のバードウォチングと 2 回のシンポジウムを開催することができた。それぞれのバードウォチング及びシンポジウムに参加し、これらイベントを盛り上げた頂いた一般参加者の方々に感謝を申し上げます。野鳥ガイドとして関わってい頂いた、嵩原健二氏及び渡久地豊氏には、野鳥に関する事だけではなく、自然環境や地域文化等、広い観点から示唆に富んだガイドをして頂けたことに感謝を申し上げます。特に、嵩原氏については、バードウォチング及びシンポジウムの企画の段階から関わっていただき、また、バードウォチングの冊子の作成等にも関わって頂きました。感謝を申し上げます。今回、忙しい中、シンポジウムの基調講演で登壇をして頂いた山崎保男氏（兵庫県立大学大学院地域資源マネイジメント研究科長・教授）、パネリストとして登壇して頂いた村田尚史氏（名護市博物館学芸員）、渡久地豊（国指定屋我地鳥獣保護区管理員）、Gawin Chutima 氏（タイ鳥類保護協会）、青木雄司氏（（公財）神奈川県公園協会）及び神田君夫氏（やんばる自然写真工房）、コーディネーターを務めて頂いた小林政文氏（がじゅまる自然学校代表）に感謝を申し上げます。

最後に、今回のバードウォチングとシンポジウムの開催をご支援して頂いた、「（公財団）おきぎんふるさと振興基金」に感謝を申し上げます。

■資料①（冊子）

アジサシ類・バードウォチング in 恩納村

2016/07/30

群れて魚を取るエリグロアジサシ（羽地内海）

企画・手配：名桜大学国際学群新垣ゼミナール
「本イベントは、公益財団法人おきぎんふるさと振興基金（平成 28 年度）の助成を受けて実施されるものです」

《開催趣旨》

　ベニアジサシやエリグロアジサシ・コアジサシは、４月から８月にかけて沖縄で見ることのできるアジサシ類です。アジサシ類はカモメの仲間で、これらアジサシ類は、遠くオーストラリアや東南アジアから産卵・子育てのために沖縄まで飛んできます。沿岸を群で飛びまわり、急降下をして魚を捕まえる姿は沖縄の夏の風物詩の一つです。最近、屋我地地区で飛来数が減少しているとのことですが、毎年のように営巣場所を変える性質があり、他の場所では集団で営巣しているのを見ることが出来ます。
　今回、このアジサシ類の探鳥会（バードウォチング）を開催し、アジサシ類の特徴、沖縄の地理的・自然環境的な特徴等について理解を深め、アジサシ類の保護についても考えます。

日時：2016 年 7 月 30 日（土）08：00 から
場所：瀬良垣漁港（下記）
講師：嵩原健二氏（沖縄野鳥研究会）

バードウォチングサイト（瀬良垣漁港と周辺）

群れ飛ぶアジサシ類

【目　　次】

沖縄諸島周辺で見られる夏鳥のアジサシ類 ---------- １
１．ベニアジサシ *Sterna dougallii* Roseate Tern ---------- １
２．エリグロアジサシ *Sterna sumatrana* Black-naped Tern ---------- ４
３．コアジサシ *Sterna albifrons* Little Tern ---------- ６
４．その他、まれに近海で見られる夏鳥のアジサシ類 ---------- ８
５．夏鳥のアジサシ類の保護について ---------- ９
参考文献 ---------- １０

沖縄諸島周辺で見られる夏鳥のアジサシ類

沖縄の夏の真っ青な空や海に渡来してくる夏鳥のアジサシ類として、沖縄島周辺ではコアジサシやベニアジサシ、エリグロアジサシの 3 種がその代表格である。また、他には最近沖縄島周辺で繁殖を始めたマミジロアジサシ他、しばしば観察されるオオアジサシやクロアジサシ、ヒメクロアジサシ、そして、沖縄島近海では繁殖せず、台風後に保護されることがあるセグロアジサシなどの県内における夏鳥としてのアジサシ類も見られる。

本ガイドブックは沖縄島近海に夏鳥として飛来し、群れをなし海岸近くでエサを捕ったり、集団で繁殖するアジサシ類を中心にその生態を紹介する。

１．ベニアジサシ　*Sterna dougallii*　Roseate Tern　（体長：33cm）

夏の空に白い翼が映えるベニアジサシ（勝連半島）

繁殖コロニー（瀬良垣）

成鳥

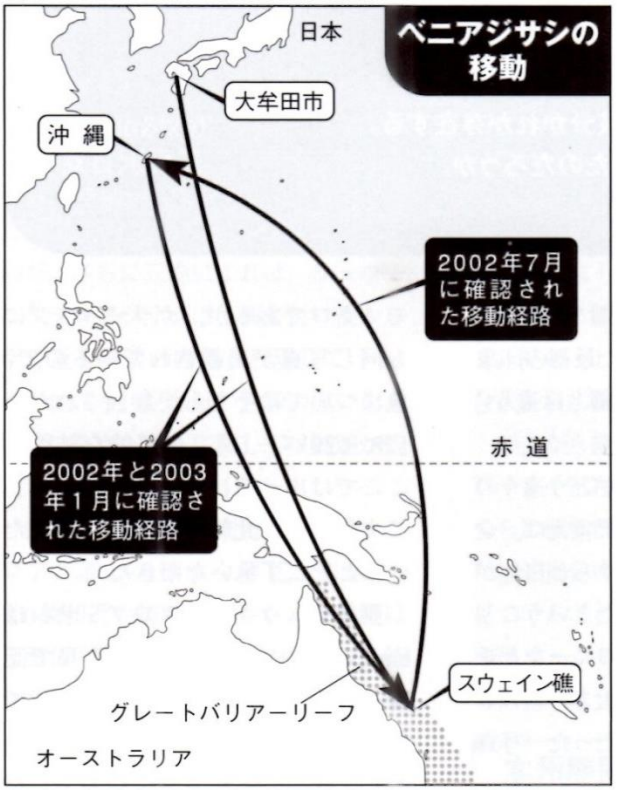
＜解説＞

ベニアジサシは中型のアジサシ類で、成鳥は頭部が帽子をかぶったように黒く、赤いくちばしと足が目立つ。沖縄には５月頃、オーストラリアや東南アジアなどから飛来し、岩礁や離れ島などで集団をつくり繁殖する。この集団のことを「繁殖コロニー」と呼ぶ。この繁殖地は毎年のように変え、同じ場所を利用することはあまりない。集団で営巣することは捕食者を発見しやすいことで危険を回避する利点が上げられる。

県内に飛来するベニアジサシの中には､オーストラリアのグレートバリアリーフにある小さな岩礁で付けられた「白フラッグ」のある個体が見られ、その渡りルートが明らかになっている。また、国内ではその渡りルートの解明のため、番号を付した金属リングと「青フラッグ」が取り付けられている。

オーストラリアで白フラッグと金属リングを標識された個体（勝連半島）

白フラッグの個体（上）
（辺野古沖浮標）



ベニアジサシの渡り（尾崎，2003）
尾崎（2003）を改変

＜分布＞

熱帯から亜熱帯域に広く分布し、北方のものは冬期に南に渡る。日本周辺では台湾・中国北東部以南。国内では南西諸島に夏鳥して飛来するが、局地的である。

＜特記事項＞

環境省版レッドリスト（RDB）
　絶滅危惧Ⅱ類（vu）
沖縄県版レッドリスト（RDB）
　準絶滅危惧種（NT）

２．エリグロアジサシ　*Sterna sumatrana*　Black-naped Tern　（体長：30cm）

エリグロアジサシ

繁殖コロニー（抱卵中：本部町）

飛翔個体（本部町）

＜解説＞

背面や翼が白く、白さが目立つアジサシで、コアジサシより大きく、目先から後頭部にかけて黒い帯があり、これがちょうど黒い襟（えり）のようにみえることから名付けられている。ひたいから頭上は白く、くちばしと足は黒い。ベニアジサシ同様に５月頃から飛来し、県内各地で繁殖する。ベニアジサシのように大きな集団繁殖地を持たず、急峻な崖地や岩場のへりなどを営巣地にして小さな集団で繁殖する。しばしば、ベニアジサシ繁殖コロニーのへりなどで同一場所を利用し、繁殖することもある。

育雛

＜分布＞

インド洋と西太平洋の熱帯から亜熱帯域で繁殖し、北方のものは冬期に南に渡る。国内では奄美諸島以南の南西諸島に夏鳥して飛来する。

＜特記事項＞

環境省版レッドリスト（RDB）
　絶滅危惧Ⅱ類（vu）
沖縄県版レッドリスト（RDB）
　準絶滅危惧種（NT）

３．コアジサシ *Sterna albifrons*　Little Tern　（体長：28cm）

抱卵

育雛

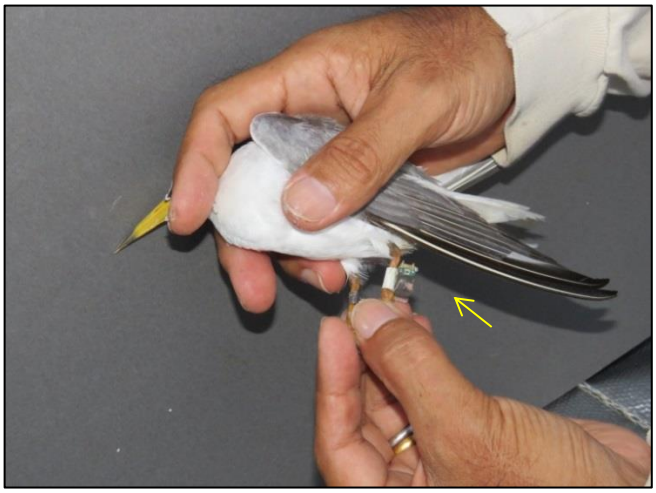
雛と卵

＜解説＞

コアジサシは４月の中頃に夏鳥として最も早く渡来するアジサシ類で、黄色のくちばしと黒い頭部が特徴的なアジサシである。海岸近くの埋め立て地や砂浜などで集団をなし、繁殖する習性がある。餌はカタクチイワシなどの小魚を水中にダイビングして捕らえる。卵は１～２個で、埋め立て地などの巣材のないくぼみに産み落とされる。

最近、本種については渡りを解明するため「ジオロケーター」や「衛星利用測位システム（GPS）ロガー」などを利用した渡り調査が県内でも実施されている。

飛翔個体



衛星からの電波をキャッチし、位置情報を記録し続ける「GPS ロガー」を背中に取り付けた個体

日の出と日の入りを規則的に記録し続けることで、緯度や経度を割り出し、渡りのルートを知ることができる「ジオロケーター」（矢印）を取り付けた個体

＜分布＞

ユーラシア大陸中緯度地域と南アジアで広く繁殖し、北方のものは冬期に南に渡る。国内では本州以南に夏鳥として飛来するが、局地的である。

＜特記事項＞

環境省版レッドリスト（RDB）
　絶滅危惧Ⅱ類（VU）
沖縄県版レッドリスト（RDB）
　絶滅危惧Ⅱ類（VU）

４．その他、まれに近海で見られる夏鳥のアジサシ類

マミジロアジサシ *Sterna anaethetus*
Bridled Tern（体長：35.5cm）

これまで宮古諸島が国内における繁殖の北限とされていたが、最近、沖縄諸島のコマカ島や伊平屋島などで繁殖が確認されている。

背面は黒く、額（ひたい）や喉（のど）から腹部までの下面は白い。

分布域は太平洋、大西洋、インド洋の熱帯から亜熱帯域。

沖縄県版 RDB:順絶滅危惧（NT）

クロアジサシ *Anous stolidus*
Brown Noddy（体長：42cm）

宮古諸島のフデ岩やパナリ岩礁などが繁殖の北限で、八重山諸島の仲の神島でも繁殖している。しばしば、こうした繁殖地を離れ、沖縄島近海に姿を見せることもある。

全身が黒褐色で、ひたいに白色部がある。分布域は太平洋、大西洋、インド洋の熱帯から亜熱帯域。

沖縄県版 RDB:順絶滅危惧（NT）

オオアジサシ *Sterna bergii*
Greater Crested Tern（体長：45cm）

かつては南大東島で夏鳥として繁殖していた記録があるが、現在では尖閣諸島の北小島で繁殖している。

成鳥ではくちばしは黄色で、足は黒い。分布域は太平洋やインド洋の熱帯から亜熱帯地域、オーストラリア。

環境省版レッドリスト（RDB）
　絶滅危惧Ⅱ類（VU）
沖縄県版レッドリスト（RDB）
　絶滅危惧Ⅱ類（VU）

ヒメクロアジサシ *Anous minutus*
Black Noddy（体長：39cm）

国内では夏鳥として硫黄（いおう）島で少数が繁殖する。

全身黒色で額（ひたい）から首の後ろにかけて白い色をしている。くちばしは黒色で細長く、足も黒色。クロアジサシに似るが、全身黒色味が強く、小さい。

分布域は太平洋と大西洋の熱帯と亜熱帯域に広く分布する。 宮古諸島周辺の岩礁には毎年のように飛来する。沖縄近海でもしばしば観察される。

５．夏鳥のアジサシ類の保護について

夏場､沖縄県内の島々の周りにある岩礁や無人島などで集団をなして繁殖するアジサシ類の保護のためには、やはり、集団繁殖地（コロニー）内に立ち入らないようにすることが大切です。しばしば釣りを行うためこうした岩礁や離れ岩などに登る場合がありますが､繁殖期間はこうしたことをさけ、上陸は差し控え、親鳥の育雛をあたたかく見守りましょう。また、勝手に卵や雛を持ち帰らないようにしましょう。

さらに､釣りを行う際には残ったテグスやごみなどは必ず持ち帰りましょう。テグスが残っていると鳥にからむ危険性があり､ゴミが多いと海鳥の天敵であるネズミ類やカラスを増やしてしまうことになります。

アジサシ類の繁殖場所

＜参考文献＞

沖縄県文化環境部自然保護課編（2005）改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物（動物編），レッドデータおきなわ．561pp.
尾崎清明（2003）人と鳥、水際のせめぎあい，ベニアジサシに訪れた危機．バーダー7 月号（2003 年 7 月）．p.38-41.
環境省編（2014）日本の絶滅のおそれのある野生生物（鳥類），Red Date Book 2014，2．250pp.
文一総合出版編（2003）夏のアジサシウォッチング，バーダー7 月号（2003 年 7 月）．

本文作成
嵩原　健二
（沖縄野鳥研究会）

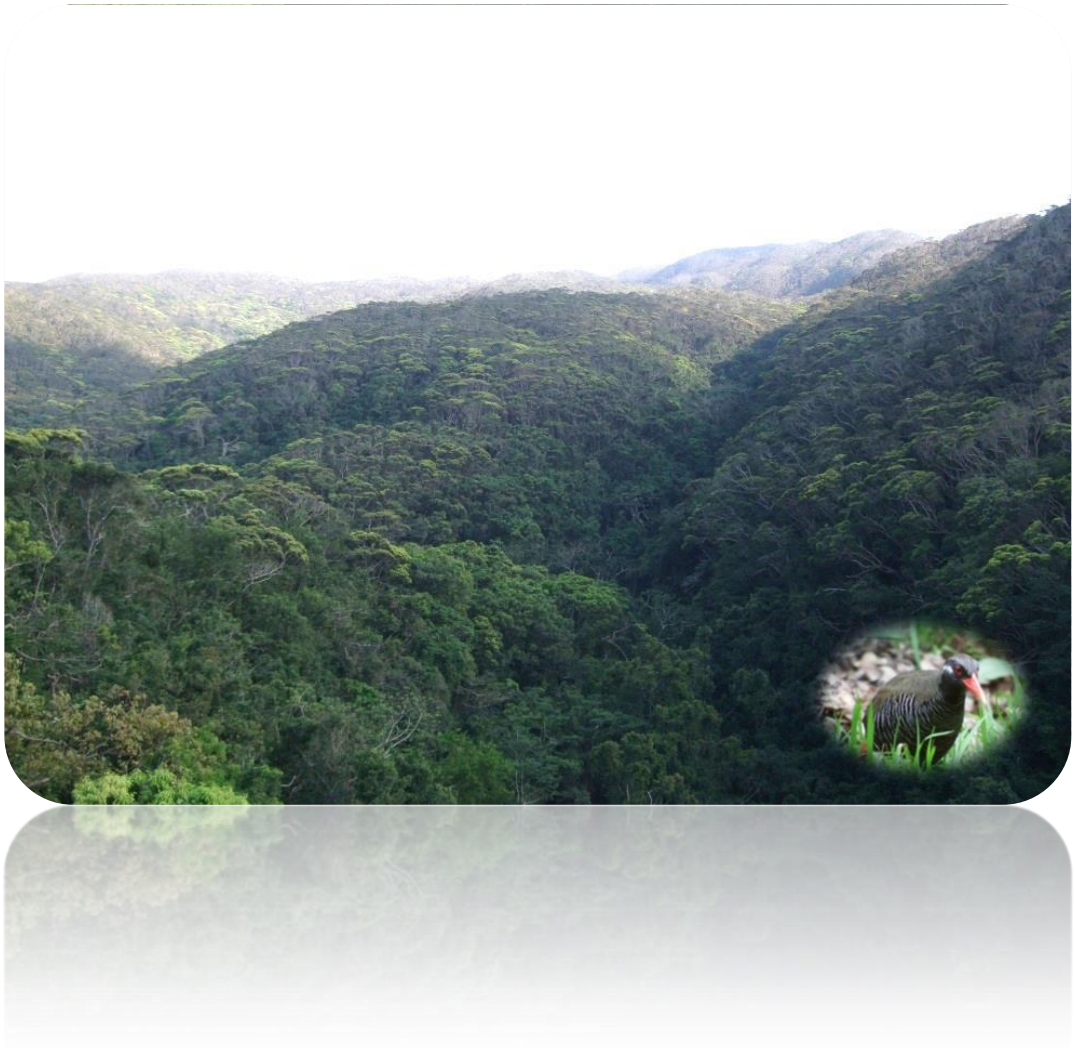
注　　意
本冊子は、本バードウォチングの資料として作成したものです。写真等未発表のものが含まれています。製作者の許可なく転載及び画像の使用を禁止します。

連 絡 先
新垣裕治
（名桜大学国際学群教授）
y.arakaki@meio-u.ac.jp

第２回バードウォチング企画

“やんばる”早朝バードウォチング
バスツアー

2016 年 09 月 24 日（土）



企画・手配：名桜大学国際学群新垣研究室

※この活動はおきぎんふるさと振興基金（平成 28 年度）の支援を受けて実施されます

開催趣旨

“やんばる”にはそこにしかいない生き物が多数生息しています。ヤンバルクイナ・ノグチゲラ・アカヒゲ等です。このツアーでは、生き物が活発に動き回る早朝に“やんばる”の森で野鳥観察等をすします。“やんばる”Only One 体験を通し“やんばる”自然について考えます。

日時：H28/09/24（土）5：00－14：00
講師：嵩原健二（沖縄野鳥研究会）

ツアーの予定

名桜大学バス停（本部棟横）
↓
為又バス停（白銀薬局前）05：05
↓
名護十字路ﾊﾞｽ停（市営市場側）05：15
↓
国頭村楚洲（ヤンバルクイナが目撃できそな場所をバスで移動しながら）
（早朝に採餌するﾔﾝﾊﾞﾙｸｲﾅ観察）
↓
学びの森
（朝食と休憩、ﾊﾞｰﾄﾞｳｫﾁﾝｸﾞ）
↓
ヤンバルクイナ生態展示施設訪問（キョンキョンの朝の活動観察）
↓
ゆいゆい国頭（国頭村道の駅）（休憩と昼食）
↓
喜如嘉ターブックワ（もう、冬鳥が渡ってきています）
↓
名護十字路バス停・為又バス停
↓
名桜大学バス停 14：00

ヤンバルの森

ヤンバルの亜熱帯常緑広葉樹林（ボチョウジーイダジイ群団）

シイ林の階層構造図（極相林）

沖縄のドングリ類（ブナ科植物）

アマミアラカシ
（石灰岩地に多い）

イタジイ
（非石灰岩地に生育・食用）

オキナワウラジロガシ
（非石灰岩地に生息・日本最大ｸﾗｽのﾄﾞﾝｸﾞﾘ類）

マテバシイ
（非石灰岩地に多い）

沖縄のﾄﾞﾝｸﾞﾘ類：

６種（オキナワウラジロガシ・ウラジロガシ・アマミアラカシ・イタジイ・マテバシイ・ウバメガシ）

ヤンバル固有の植物

リュウキュウコンテリギ

オキナワセッコク

他 17 種（オリヅルスミレ・コバノミヤマノボタン・リュウキュウナガエサカキなど）

（備考：ヤンバルから記録のある高等植物（維管束植物）：1089 種（シダ類 93 種、裸子植物 5、被子植物 991 種）

ヤンバルで見られる代表的な動物（鳥類・ほ乳類）

アカヒゲ（写真は雄）
（ヤンバルーの美声の持ち主・コマドリの仲間）

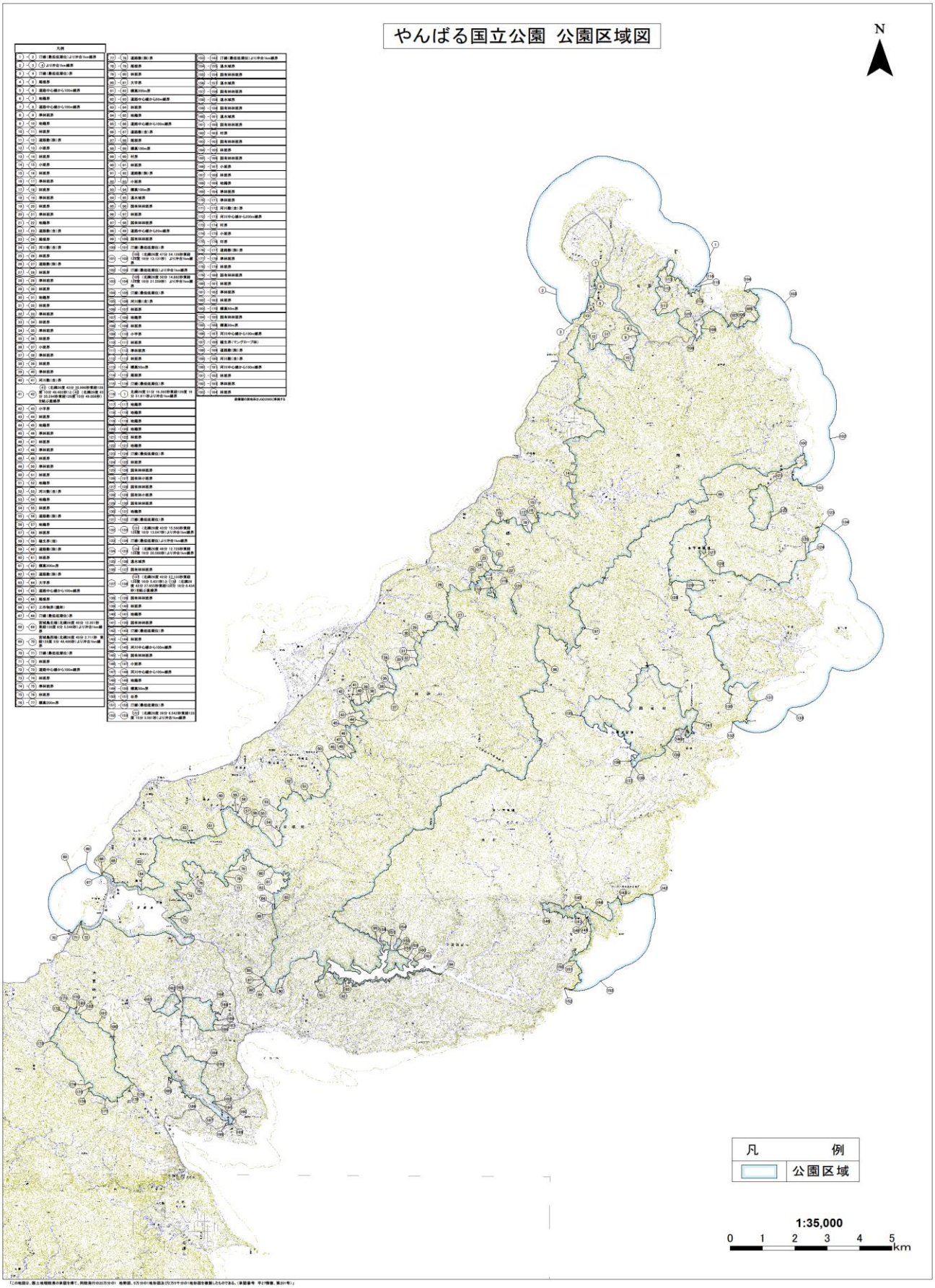
ヤンバルクイナ
（ヤンバル固有のクイナ類・1981 年新種記載）

ノグチゲラ（雌）

リュウキュウキビタキ
〔固有種とされる〕

ケナガネズミ
（国内最大の野生のネズミ：奄美沖縄の固有種）

リュウキュウマツの食
痕（エビの尻尾）



２０１６年９月１５日にやんばる国立公園指定　陸域：１３,６２１ha・海域：３,６７０ha

北部国有林：７,５１３ha（内北部訓練場：６,９００ha）備考：SACO 合意での返還予定地：３,９８７ha

森林の有する多面的機能（林野庁ホームページから）

森林は、生物多様性の保全、土砂災害の防止、水源のかん養、保健休養の場の提供などの極めて多くの多面的機能を有しており、私たちの生活と深くかかわっています。日本学術会議の答申では、森林には次のような機能があるとされています。

森林の機能一覧

生物多様性保全

遺伝子保全
生物種保全
　植物種保全
　動物種保全（鳥獣保護）
　菌類保全
生態系保全
　河川生態系保全
　沿岸生態系保全（魚つき）

地球環境保全

地球温暖化の緩和
　二酸化炭素吸収
　化石燃料代替エネルギー
地球気候システムの安定化

土砂災害防止機能／土壌保全機能

表面侵食防止・ 表層崩壊防止
その他の土砂災害防止
　落石防止
　土石流発生防止・停止促進・飛砂防止
土砂流出防止
土壌保全（森林の生産力維持）
その他の自然災害防止機能
　雪崩防止・防風・防雪・防潮など

水源涵養機能

洪水緩和・ 水資源貯留・ 水量調節
水質浄化

快適環境形成機能

気候緩和
　夏の気温低下（と冬の気温上昇）
　木陰
大気浄化

保健・レクリエーション機能

療養（リハビリテーションなど）
保養
　休養（休息・リフレッシュ） 散策
　森林浴
レクリエーション
　行楽・スポーツ・ つり

文化機能

景観（ランドスケープ）・風致
学習・教育
　生産・労働体験の場
　自然認識・自然とのふれあいの場
芸術
宗教・祭礼
伝統文化
地域の多様性維持（風土形成）

物質生産機能

木材
　燃料材・建築材・木製品原料
　パルプ原料
食糧
肥料
飼料
薬品その他の工業原料
緑化材料
観賞用植物
工芸材料

快適環境（続き）

　汚染物質吸収
快適生活環境形成
　騒音防止

資料作成
嵩原　健二
（沖縄野鳥研究会）

連 絡 先
新垣裕治
（名桜大学国際学群教授）
y.arakaki@meio-u.ac.jp

平成 28 年度 名桜大学新垣研究室企画 シンポジウムⅠ

バードウォチングとエコツーリズム Ⅰ
～地域活性化と観光促進～

日時／場所

2016 年 9 月 24 日（土）
16：00～18：30

名桜大学 SAKURAUM（3 階）
大講義室 B

企画・手配：名桜大学国際学群新垣研究室

※この企画は、「公益財団法人おきぎんふるさと振興基金」（平成 28 年度）の助成を得て実施されます。

【プログラム】

［開会］新垣裕治氏（名桜大学国際学群教授）

［基調講演］ 16：05ー
江崎保男氏（兵庫県立大学大学院地域資源マネイジメント研究科長・教授）
「コウノトリ野生復帰と生物多様性保全」（p.2）

《休憩》 5 分

［パネルディスカション］ 17：00ー
村田尚史氏（名護市博物館学芸員）
「名護におけるアカハラダカ・サシバの渡り調査について」(p.3)

渡久地　豊氏（国指定屋我地鳥獣保護区管理員）
「ニュージランドを訪ねて思ったこと・・・」(p.4)

新垣裕治（名桜大学国際学群教授）
「アジア地域におけるバードウォチング・イベント」(p.5)

［総合討論］17：50ー
コーディネター：小林政文氏（ホールアース自然学校 沖縄校 がじゅまる自然学校代表）

［閉会］嵩原健二氏（沖縄野鳥研究会）

コウノトリ野生復帰と生物多様性保全

江崎保男
兵庫県立大学大学院地域資源マネジメント研究科(RRM)長

コウノトリ *Ciconia boyciana* の国内繁殖個体群は 1971 年に絶滅したが、2005 年から兵庫県豊岡市において兵庫県立コウノトリの郷公園が再導入を開始し、2016 年 9 月現在、野外個体群サイズは 90 を越え、10 ペアが野外で繁殖している。野外個体は色足環によって個体識別可能であり、既にその社会構造がほぼ明らかになっているが、この中には、①堅い絆の一夫一妻であること、②ペアなわばりが基盤になっていること、③3 歳の繁殖開始齢に達する以前の若いフローターが多数いること、④頂点捕食者としての激しい種内闘争が存在すること、⑤親による子殺しが起きること、⑥なわばり内に居候が存在すること、などが含まれる。また個体群サイズはこの 11 年間に直線的に増大してきたが、豊岡を含む但馬地方にとどまる個体数には頭打ちの傾向がみえ、現時点での但馬の環境収容力は、50 羽程度であると推定される。

若鳥を中心とするフローターは頻繁に但馬地方の外にでて、全国を飛び回っているが、これらの鳥を新たな地に定着させるべく行われているのが、（遺伝的多様性の向上を図るべく）仮親に卵を預けて育てさせ、巣立ちビナを野に放つソフトリリース事業である。そしてその結果、仮親の存在が、他の個体を誘引する「デコイ効果」を有することが判明した。また、一部の鳥は国内外の同一地域に長期滞在することが判明したが、すべての事実は、「餌と配偶者」が、繁殖地拡大の条件であることを明瞭に指し示している。なお頂点捕食者コウノトリにおいて、捕食回避への配慮が必要ないことは、当然のことである。

そこで私が提唱しているのは、コウノトリの各地への飛来を活用して、官民学連携のもと、ハビタット整備を進め、その繰り返しにより、コウノトリの全国への分散・定着確率を高め、ひいては繁殖に辿りつかせようとする「正のスパイラル戦略」である。そして、その結果として達成されるのが、淡水魚を主体とする「地域の生物多様性保全」ということになる。

ところで、この戦略の前提は、かつて地域住民が有していた「コウノトリ＝害鳥」という意識を、「良き存在」に変えることであり、そのこと自体が官民学の連携によって達成された。また今後、極東における「メタ個体群構造の復活」が目標として存在するが、その達成には、「コウノトリの地域資源としての活用」という考え方が有効である。但馬地方においては、県と市が推進する「コウノトリ育む農法」を典型例としてあげることができるが、この農法がアキアカネの復活に一役買うことが、当研究科学生の研究によって明らかになりつつある。

このように、RRM（地域資源マネジメント研究科）は、「地域の歴史に裏付けられた多様な地域資源」を材料にした学問の統合を行い、「地域資源のワイズユースによる地域振興」に貢献することを目指している。

名護におけるアカハラダカ・サシバの渡り調査について

村田尚史
名護博物館学芸員

名護博物館および名護博物館友の会では、2008年から沖縄野鳥研究会の嵩原建二氏の指導の下、秋季に琉球弧上空を通過して南へ渡っていくアカハラダカ *Accipiter soloensis*の個体数カウント調査を市内で継続して行ってきた。調査の目的は、本種の渡りの様相を把握し、その飛去数をモニタリングすることであるが、市民が本種の雄大な渡りを通して名護市の自然に親しみ、自然環境への興味・関心を持つことを目的とした普及啓発活動としての側面にも重点を置いている。このため、調査前後と調査期間中に誰でも参加可能な学習会や情報交換会、フィールドにおける観察会等を実施するほか、博物館や調査メンバーのブログで、調査結果についての情報発信もリアルタイムで行い、広く一般に情報発信を行っている。調査メンバーは名護博物館と名護博物館友の会を中心に、自然に関心のある有志で構成されているが、それ以外の一般市民の参加も歓迎しており、これまでにも多くの人が調査に関わってきた。

調査地点は、名護岳、嘉津宇岳を中心とし、年によっては多野岳等においても実施してきた。9月中旬から10月下旬にかけて、各調査地点でメンバー2～3名が毎朝7～9時の時間帯を中心に渡りを行うタカ類のカウントを行っている。アカハラダカの渡りは、調査地点の周辺の森から飛び立ち上昇気流に乗って帆翔した後、滑空という一連の流れを繰り返して飛去する場合と、調査地点から目視可能な上空高くを通過して飛去する場合の主に2通りが観察される。飛去個体数は、日差しのあるよく晴れた北風の吹いている日に多く観察される傾向があり、9月下旬～10月上旬にピークを迎える。10月上旬には、アカハラダカに入れ替わるようにしてサシバ*Butastur indicus*の渡りも観察されるようになる。2008年当初においては、アカハラダカの渡りに調査の重点を置いていたが、ここ数年はサシバのカウント調査も精力的に行っている。なお、アカハラダカに比べると、サシバは少々の悪天候でも渡りを行う傾向があり、その時間帯も幅広い。2008年～2015年の調査において、名護岳、嘉津宇岳の両地点でアカハラダカは計80,225個体、サシバは計23,566個体の渡りをカウントした。各年の確認個体数はアカハラダカ3,233～18,709個体、サシバは649～5,042個体であった。

今年で9年目を迎える本調査であるが、様々な課題も抱えている。まず、平日毎朝の調査に参加できるメンバーは限られており、少人数の調査メンバーの負担が大きいものとなっている。また、勉強会等で情報共有を図ってはいるが、種を判定して渡りを視認する能力には個人差があり、初めて参加するメンバーが調査に慣れるまでにはフィールドでの訓練と時間を要する。サシバについては、限定的に調査時間を延長して調査を行った際に、9時以降も渡りを行っていることが明らかになっており、恒常的に調査時間を延長することが望ましいが、これは人的、時間的制限から現状では難しい。渡りの実態を把握するためには、これらの課題を解決し、可能な限り定量的なモニタリング調査に近づける必要がある。今後も広く一般に情報発信し、調査メンバーの確保に努めるとともに、島外各地で行われている調査メンバーとも情報交換を行い、調査の充実を目指したい。

ニュージランドを訪ねて思ったこと・・・

渡久地　豊
国指定屋我地鳥獣保護区管理員

2014 年の秋、山階鳥類研究所上席研究員尾崎清明氏の研究協力者としてニュージランドの視察に同行しました。目的は、ヤンバルクイナ同様の固有種の飛べないクイナのウエカの飼育下で繁殖した個体の野生復帰の現場を視察することでした。ウエカの野生復帰が成功している背景には、徹底した外来種のネズミやオポッサムなどの駆除がありました。やんばるでも外来種のフイリマングースの駆除が実施され成果が表れていますが、まだ途上にあります。ニュージランドは入植当時と比べてかなりの森林が伐採され、広大な牧場などに変わっています。絶滅した種も少なからずありました。今では国内の各所に広大な国立公園があり保全がされています。また、車で移動していて道路にゴミがほとんどなく、環境への意識がとても高い美しい国でした。国立公園内には環境について学べる部屋が完備され、子どもたちが野生生物の専門官から環境について教わるそうです。野生復帰成功につながる礎のようなものがそこにはあるのではと感じました。

さて、ニュージランドではウエカの視察の合間に渡り鳥の飛来地の Miranda(ミランダ)でバードウォッチングを楽しみました。そこは、アラスカで繁殖するオオソリハシシギの越冬地として知られています。他にも多くの水辺の鳥が見られました。砂浜に木造りの観察小屋が設けられており、その中では見ず知らずのバードウォッチャーと「あそこにあの鳥がいるよ」などと、先に見つけた鳥をお互いに教え合ったりしながら、とても楽しいひと時を過ごすことが出きました。また、近くにはバードウォッチャーが宿泊できる Miranda Shorebird Center があり、館内には鳥の剥製や、調査で解明された渡りのルートなどのパネルが展示されていました。その中で最もワクワクさせてくれたのが、鳥類の書籍や様々なグッズを販売しているコーナーでした。

私たちの周りで見られるほとんどの鳥は人影を察知すると飛んで逃げていきます。そのため多くのバードウォッチャーは車内から鳥を観ているのが現状です。それほど広くない農道などに車を止めてバードウォッチングをすることは、農家の方に大変ご迷惑をかけることになります。多くの渡り鳥が飛来する沖縄の探鳥地でも、このような観察小屋があればもっと鳥が身近になり、見ず知らずのバードウォッチャーと直接の交わりも増えるのではないでしょうか。常に環境の保全を最優先しつつ、適所には鳥と人の距離を縮めてくれる観察小屋を設け、販売コーナーなどで地元ならではのグッズを販売すれば、バードウォッチングとエコツーリズムによる**~地域活性化と観光促進~**につながるのではないかと思います。

アジア地域におけるバードウォチング・イベント

新垣裕治
名桜大学国際学群教授

ここ数年、東南アジア地域でバードウォッチングイベントに参加する機会を得ている。これまで、台湾、マレーシア、シンガポール及びフィリピンで行われたバードウォッチングイベントに参加した。今年の予定としては、11 月に中国（湖北省京山県）で開催される Asian Bird Fair（ABF）のイベントに 5 人のチームで参加の予定である。

ABF は、2010 年にフィリピンのダバオ市で Wild Bird Club of Philippines を主催者として第 1 回目が開催された。その後、台湾（第 2 回、Chinese Wild Bird Federation 主催）、タイ（第 3 回、Bird Conservation Society of Thailand 主催）、台湾（第 4 回、Wild Bird Society of Taipei 主催）、マレーシア（第 5 回、Malaysia Nature Society 主催）、シンガポール（第 6 回、Nature Society of Singapore 主催）で開催され、今年は第 7 回大会として中国湖北省京山県で Cun Cao Xin Rural Environmental Protection Association を主催者としで開催される。ABF の開催目的は、「アジア地域で開催されているバード・フェアーに注目を集めることにより、鳥類とその生息環境の保全、バードウォチングの促進及びその他エコツーリズム活動を推進する為に毎年開催されるイベント」とされている。

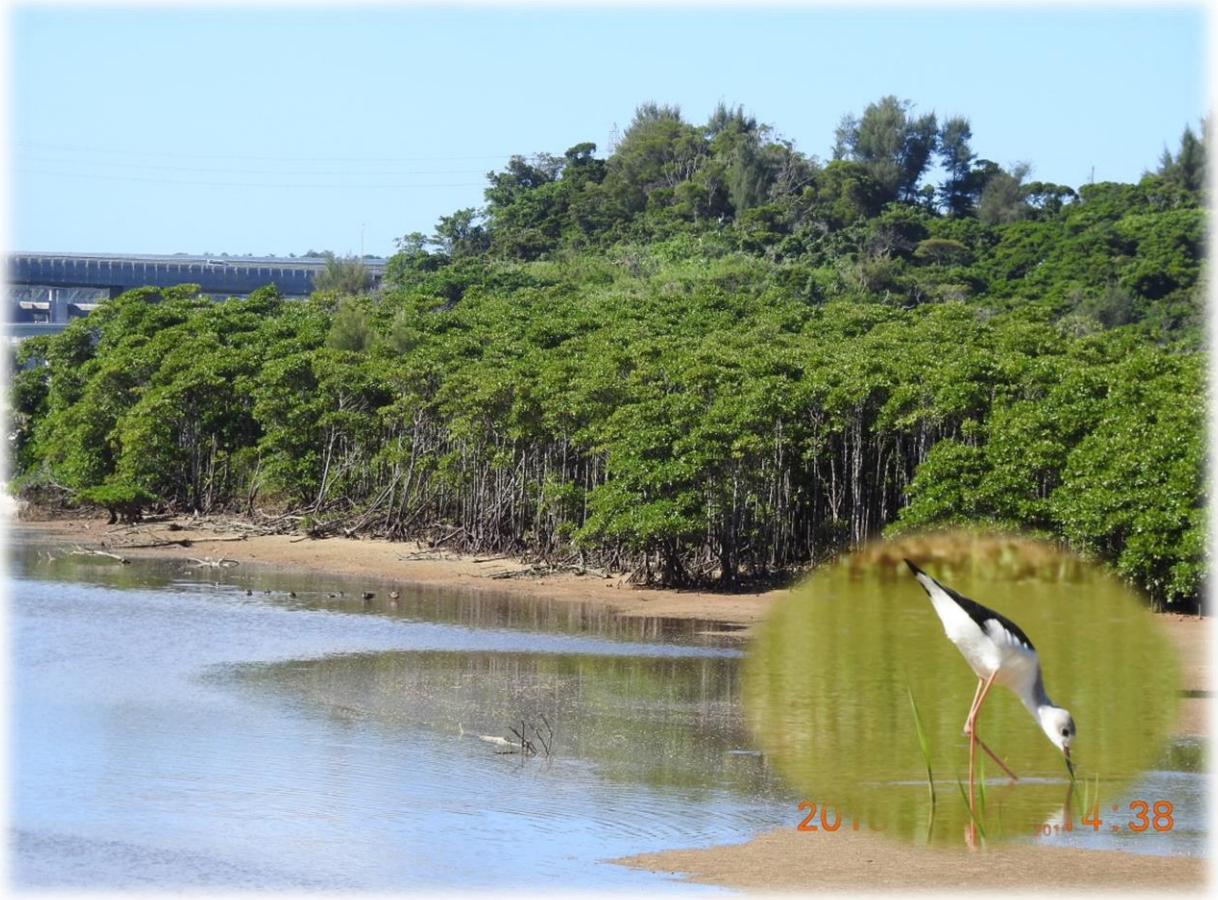
本報告では、これら ABF への参加経験を主に、東南アジア地域で開催されているバードウォッチングイベントの参加と開催の現状を鑑み、沖縄における環境教育・環境保護活動及びエコツーリズム（観光）観点からバードウォッチングイベントを捉え議論をして行く。

企画・作成
新垣裕治
名桜大学国際学群教授
0908-51-1081
y.arakaki@meio-u.ac.jp

平成28年度第3回バードウォチング企画

「湿地・冬鳥バードウォチング・バスツアー」

日時：H28/12/18（日）08：30－15：00
場所：金武町億首川水田地帯・その他



企画・手配：名桜大学国際学群新垣研究室

※この活動はおきぎんふるさと振興基金（平成28年度）の支援を受けて実施されます

開催趣旨

沖縄では冬に多く野鳥を観察することができます。その多くは渡り鳥（冬鳥）です。湿地や干潟に行けば、シギ・チドリ、サギ類等を多く見ることがでます。冬のバードウォチングで“やんばる”“沖縄”の新たな魅力が発見できます！！

講　師

嵩原健二（沖縄野鳥研究会）/
渡久地　豊（国指定屋我地鳥獣保護区管理員）

スタート：08：30（5分前には集合！）
名桜大学バス停（本部棟横）
↓
為又バス停（白銀薬局前）08：35
↓
名護十字路ﾊﾞｽ停（市営市場側）08：45
↓
金武町（億首川水田等）
↓
泡瀬干潟周辺等＊
↓
その他（主要な探鳥場所等）＊
↓
名護十字路バス停・為又バス停
↓
名桜大学バス停15：00

＊当日の状況等により変化の可能性あり

（１） 金武町並里地区

並里地区のタイモ栽培地

耕転作業時に餌を求めるサギ類

金武町並里地区の周辺にはタイモ畑（栽培地）や水田が広がり、億首川沿いにはマングローブ林も見られる。ここは県内有数の探鳥地で、主に水辺の鳥を見ることができ、シギ類のセイタカシギやタカブシギ、アオアシシギの他、サギ類チュウサギ、ダイサギ、アマサギなどが越冬する。他にはケリやタゲリなども時々渡来する。もちろん、留鳥のカワセミは河川沿いで見られ、水田に生息するバンの姿が多い。時々ヒクイナやリュウキュウヨシゴイなども見ることある。数少ない記録として、マガンやナベヅル、ヒシクイ、ソリハシセイタカシギなども渡来し、しばらく滞在することもある。かなり稀な例では東南アジアにすむミナミクイナやコモンクイナなども観察され、これらは国内初記録である。最近ではかなり珍しいコシギが観察された。

タゲリ

ケリ

オオヒシクイ

サギの群れ

作成：嵩原健二

（２） うるま市照間・照間海岸・海中道路地区

照間のイグサ栽培地

照間海岸干潟

うるま市勝連半島の北側に広がるイグサ栽培地が、貴重な水鳥の生息地となっている。ここにはシギ類としてセイタカシギやアカアシシギ、ハマシギなどが渡来し、サギ類ではダイサギ、コサギなど、カモ類でカルガモやオナガガモなどが越冬する。留鳥はバンの姿が多く、時にはヒクイナやリュウキュウヨシゴイ、タマシギなどが見られる。最近ではソリハシセイタカシギやアカガシラサギなどの数少ない冬鳥の渡来も見られた。

また、照間の海岸線から海中道路沿いの干潟には留鳥のシロチドリやクロサギなどが生息し、冬鳥として渡来するダイシャクシギやダイゼン、ミユビシギなどが餌を探して集まり、ここで越冬する。時にはミヤコドリが観察されたこともある。

アカガシラサギ

セイタカシギ

ダイシャクシギ

ダイゼン

作成：嵩原健二

（３） 沖縄市泡瀬地区

比屋根湿地

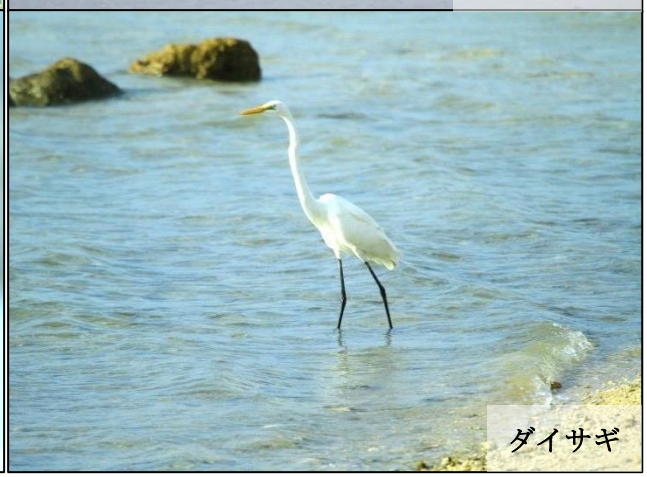
泡瀬干潟

県総合運動公園の北側にある比屋根湿地と、米軍通信基地に隣接した干潟が探鳥地である。比屋根湿地にはマングローブ林や池があり、ここにはサギ類やシギ類が休息のために訪れる。河川沿いではカワセミやバンが見られる。泡瀬通信基地近くでの干潟では、ダイシャクシギやオオソリハシシギ、ムナグロ、ダイゼン、ユリカモメなどが餌を求めて飛来し、ここで越冬する。時にはクロツラヘラサギが見られることもある。なお、通信基地内には池沼が多く、ここにはカルガモ、オナガガモなどカモ類が越冬する。

ムナグロ

オナガガモ

ミサゴ



ダイサギ

作成：嵩原健二

（４） 沖縄市倉敷ダム地区

ダム全景

渡来したオオバン

沖縄市倉敷とうるま市石川楚南にまたがる県のダムで、ダム湖には冬鳥のカモ類やクイナ類、サギ類を中心に数多くの種類が集まり、越冬する場所となっている。

特にオオバンは毎年のように約 200 羽を越す数が飛来する。カモ類ではヨシガモやヒドリガモ、キンクロハジロなども見られる。他にはミサゴやカワウなども観察できる。なお、数少ない渡来記録としては、サカツラガンやレンカク、カンムリカイツブリなどが渡来したこともある。

留鳥としてはカワセミやバン、リュウキュウツバメなどが生息する。

＜野鳥豆知識＞

◎野鳥の渡り区分

野鳥は渡りを行わない種と季節により生息地を変える「渡り」を行う種が見られます。こうした生活の仕方をそのおおよそで区分し、渡りを行わない種を**「留鳥」**と呼び、夏場に繁殖のため南方地域から渡来する種を**「夏鳥」**と呼びます。また、沖縄よりさらに南の地域で越冬するため、沖縄を通過していく種を**「旅鳥」**、沖縄で冬越しを行うために渡来する**「冬鳥」**があります。時には東南アジアや中国大陸などに生息する種が迷いこんで飛来する場合を**「迷鳥」**と呼んでいます。沖縄は国内でも特にこの「迷鳥」が多く飛来する地域となっています。

最近金武で確認された迷鳥のコシギ

作成：嵩原健二

沖縄県北部【金武町億首川周辺】

▼解　説

沖縄島北部の金武(きん)町にある水田や田イモの栽培地域と、金武ダム下流部の億首(おくくび)川河口に広がるマングローブ林の地域が県内でも有数の探鳥地となっています。

ここには留鳥のバンやシロハラクイナ、カイツブリ、リュウキュウヨシゴイ、カワセミ、タマシギなどの水辺の鳥が生息しています。秋季から冬季にかけてはダイシャクシギ、キアシシギ、アオアシシギ、ツメナガセキレイ、ダイサギ、アオサギ、コサギ、コガモ、ヒバリ、タヒバリ、タシギ、タゲリ、クサシギなど数多くの旅鳥や冬鳥が飛来してきます。ときにはアカツクシガモ、サカツラガン、マガン、レンカク、クイナ、コシギなど数少ない渡り鳥が訪れることもあります。

観察には並里の水田地域内の農道を歩いたり、億首橋の上や川沿いの農道から河川にできる小規模な干潟やヒルギ林などが観察には適しています。また、ブルービーチ側の水田地域も立ち寄ってみましょう。

▼ベストシーズン

秋季・冬季

▼交　通

那覇からは沖縄市や石川市を経由する名護東線を利用し、金武町並里で下車して海岸に向けて歩くと約 10 分くらいで行けます。

▼近くの探鳥地

屋嘉や伊芸の周辺にも水田地域があり、水辺に生息する野鳥がみられます。

Copyrights 1999 琉球文化アーカイブ All rights reserved

沖縄県中部【照間水田】

▼解　説

勝連半島（かつれんはんとう）の北側付け根付近に広がる照間（てるま）の集落は、かつてイネやイ草の一大産地でしたが、近年はサトウキビやキク栽培の畑に変わり、水田地域も年々小さくなっています。

ここでは集落周辺やサトウキビの間に広がる水田やイ草畑にクイナ類やサギ類、シギ・チドリ類を中心とした水辺の鳥が生息しています。留鳥（りゅうちょう）ではリュウキュウヨシゴイやバンが生息し、やや乾燥した休耕田ではセッカやアミハラなどが見られます。秋季から冬季にかけては、シギ・チドリ類やサギ類が数多く飛来し、エサを探します。シギ類ではタカブシギ、ヒバリシギ、トウネン、イソシギなどが見られ、時にはセイタカシギ、オグロシギ、エリマキシギなども訪れます。チドリ類ではムナグロ、シロチドリ、コチドリなどが生息し、サギ類ではコサギ、ゴイサギ、ササゴイなどがエサを探します。時には開けた場所でエサを探すサシバやチョウゲンボウなどの姿を見ることもあります。

▼ベストシーズン

秋季・冬季

▼交　通

那覇からは屋慶名（やけな）線を利用し、南風原（はえばら）で下車し北側海岸方向へ歩いて 10 分くらいでいけます。車を利用すると、具志川市から勝連半島に右折し、太田三叉路の信号を過ぎて左折します。

▼近くの探鳥地

平安座島へつづく海中道路の両わきにひろがる砂泥質の干潟やリーフにも、潮がひくとサギ類やシギ・チドリ類が集まってきます。

Copyrights 1999 琉球文化アーカイブ All rights reserved

沖縄県中部【比屋根干潟】

▼解　説

沖縄市比屋根(ひやごん)にある沖縄県総合運動公園の北側に隣接(りんせつ)する干潟で、オヒルギやメヒルギなどのマングローブ林やセイコノヨシの広がる湿地が、住宅地や公園、海岸道路に取り囲まれるように残されている地域です。ここは潮の干満で海水が出入りする水路があり、潮が引くと干潟や水たまりになった場所が見られます。ここでは水辺を利用する留鳥(りゅうちょう)のバンやカワセミ、リュウキュウヨシゴイなどが生息します。また、海岸地域でエサをとるクロサギの姿を見ることもあります。

秋季から冬季にかけてはチドリ類のムナグロ、ダイゼン、コチドリ、シギ類のセイタカシギ、アカアシシギ、アオアシシギ、ハマシギ、チュウシャクシギなどが飛来してきます。また、サギ類では大型のアオサギ、ダイサギなどが姿をみせ、コサギ、ゴイサギ、ササゴイなどもここでエサを探します。カモ類ではコガモが飛来してきてここで越冬し、冬季には渡り鳥でにぎわってきます。まれにはクロツラヘラサギやソリハシセイタカシギなども目撃されたこともあります。

観察には総合運動公園の北側駐車場あたりや海岸道路などからがよいでしょう。

▼ベストシーズン

秋季・冬季

▼準　備

望遠鏡

▼交　通

泡瀬線(あわせせん)で渡口にて下車し、海岸道路を 15 分くらい歩くと行けます。車を利用すると、運動公園の北側駐車場で止めます。

▼近くの探鳥地

総合運動公園は、人工的に植栽されたモモタマナやアダン、オオハマホウなどが密生しシロガシラ、キジバトなどが見られます。また公園内の池にはリュウキュウヨシゴイやカワセミなどがエサをさがします。

Copyrights 1999 琉球文化アーカイブ All rights reserved

MEMO

MEMO

連絡先
新垣裕治
名桜大学国際学群教授
y.arakaki@meio-ua.c.jp

バードウォチングとエコツーリズム Ⅱ
～バードウォチング施設について考える～
Birdwatching and Ecotourism II
Consideration on Birdwatching Facilities

平成 28 年 12 月 19 日（月）
名桜大学学生会館サクラウム３階
大講義室 B
19th, Dec, 2016, (Mon)
SAKURAUM 3Floor
Lecture Room B

スンガイブロ湿地保護区（シンガポール）

企画・手配：名桜大学国際学群新垣研究室
※この企画は、「公益財団法人おきぎんふるさと振興基金」（平成 28 年度）の助成を得て実施されます。

司会進行（Moderator）
新垣裕治（名桜大学国際学群教授）
ARKAKI Yuji, Prof, School of Inter. Studies, Meio Universit

【プログラム】Program　17：00－19：30

[開会]Open remarke　新垣裕治（ARAKAKI Y）（名桜大学国際学群教授）

[報告]Report

① Bird Watching Facilities in Thailand (p2)
　タイにおけるバードウォチング施設　(p3) ※翻訳
Gawin Chutima (Bird Conservation Society of Thailand/ Asia Council BirdLife International)
ガウイン・チュティマ（タイ鳥類保護協会/ﾊﾞｰﾄﾞﾗｲﾌｲﾝﾀｰﾅｼｮﾅﾙ・ｱｼﾞｱ協議会）

② ネイチャーセンターとバードウォッチャーとの連携（p4）
　Cooperation between Nature Center and Birdwatchers
青木雄司（AOKI Yuji）（公益財団法人 神奈川県公園協会）

③ 沖縄の探鳥地施設の現状　海外・国内有名探鳥地との比較（p6）
　Current Condition of Okinawa Birding Facilities; Comparison with Famous Birding Facilities in Abroad and Japan
神田君夫（KANDA Kimio）（やんばる自然写真工房）

[休憩]Break　18：40－18：50

[総合討論]General Discussion 18：50－

[閉会]Close remarks　嵩原健二（TAKERHARA Kenji）（沖縄野鳥研究会）

Bird Watching Facilities in Thailand

Gawin Chutima

Bird Conservation Society of Thailand/Asia Council
BirdLife International

Abstract

Bird watching in Thailand began in 1962 with formation of the *Bangkok Bird Club (BBC)* by expatriates. The club first got a Thai name in 1976 and a Thai became its president in 1978. Bird Guide of Thailand, the first field guide to assist keen bird watchers, was co-authored and published in 1968 by Boonsong Lakagul and Kitti Thonglongya. It was in English similar to two later editions. "Birds of Thailand", the first field guide in Thai language, was published in 2007. Recognizing a need to conduct (bird) conservation work, the BBC was developed to become *Bird Conservation Society of Thailand (BCST)* which was established and registered in July 1993 and became a full Partner of BirdLife International in 1996.

Bird watching facilities in Thailand was developed much later around the turn of the century. Administration of national parks with well-known bird watching sites, such as Khao Yai NP (Northeast), Doi Inthanon NP (North) and Kaeng Krachan NP (South Central), began to allocate certain area of its office to set up boards to provide information about birds having been sighted there. Some NPs have boards in the field with pictures of birds that might be seen around. Observation towers were constructed but for watching wildlife in general, not exclusively birds.

Bangpu Nature Education Center (BNEC) located on the shore of the Gulf of Thailand, south of Bangkok, first opened in 2007, was generally agreed by bird watchers to provide the best bird watching facilities in Thailand due to its several enabling factors. It is also a model of cooperation between a non-state conservation organization (WWF Thailand), state agency (The Army's Logistics Department) and private sector. Up and coming is *Chumporn Raptor Center* on Khao Dinsor (Pencil Hill) in Chumporn Province, Southern Thailand, recognized as a World's premium site for watching and counting south-bound raptor migration along the East Asia Australiasia Flyway. The center was opened in 2012.

日本語翻訳

タイにおけるバードウォチング施設

ガゥイン・チュティマ

タイ鳥類保護協会/ﾊﾞｰﾄﾞﾗｲﾌ・ｲﾝﾀｰﾅｼｮﾅﾙ・ｱｼﾞｱ協議会

要　旨

タイにおけるバードウォチングは、1962 年に外国人により設立された Bangkok Bird Club (BBC)に始まる。クラブは 1976 年に初めてタイ語の名称を得、また、1978 年にはタイ人が会長に就任した。初めてのフィールドガイドである Bird Guide of Thailand は、熱心なバードウォチヤーの為に 1986 年に Boonsong Lakagul 氏と Kitti Thonglongya 氏の共著で出版された。これは、その後の２冊同様に英語で出版されたものである。初めてのタイ語のフィールドガイである Birds of Thailand は 2007 に出版された。野鳥の保護の必要性の認識から、BBC は 1993 年 7 月に Bird Conservation Society of Thailand (BCST)（タイ鳥類保護協会）に発展し設立されもので、1996 年には BirdLife International の無限責任会員になった。

タイにおけるバードウォチング施設の発展は 20 世紀の終り頃に始まった。Khao Yai NP（北西部)、Doi Inthanon NP（北部）や Kaeng Krachan NP（中央南部)等の探鳥地として有名な国立公園の管理では、その事務所機能の一部をそれら地域で観察される鳥類情報を提供するボード設置する為に移動させた。幾つかの国立公園では、その地域で観察される鳥類の写真を貼り付けたボードを野外に設置している。鳥類専用とのことではないが、野生生物観察用のタワーが幾つか建設された。

2007 年に開設した、タイ湾沿岸でバンコクの南側に位置する Bangpu Nature Education Center (BNEC)は、その可能性の高さから最も素晴らしバードウォチング施設であるの評価を多くの探鳥家から得ている。またこの施設は、州外の保護団体（タイ WWF）、州の政府機関（軍物流部）及び民間の協同のモデルでもある。最新の施設としは、2012 年に開設したタイ南部の Chumporn 州の Khao Dinsor (Pencil Hill)にある Chumporn Raptor Center（猛禽類センター）は、猛禽類の東南アジアからオーストラリアの渡りルートの南行きの渡りの観察地とし世界的な価値のある施設のとして評価されている。

ネイチャーセンターとバードウォッチャーとの連携

青木雄司
公益財団法人 神奈川県公園協会

要　旨

ネイチャーセンターとバードウォッチャーの連携として、私が勤務していた神奈川県立宮ヶ瀬ビジターセンターの例を紹介します。

宮ヶ瀬ビジターセンターは、山間部にダム建設によってできた人造湖（宮ヶ瀬湖）のほとりにありました（オープン 1986 年、閉館 2016 年）。湖と山があることから、四季を通じて山野の鳥や水辺の鳥が数多く観られ、関東でも有数の野鳥観察の場所として数多くのバードウォッチャーが訪れています。

ただし、最初からバードウォッチャーが多かったわけではありませんでした。ここまで至る経緯、その後の連携、そして課題について整理します。

１．野鳥観察の場所として認知されるまで。（基礎データの収集と広報）
- ・職員および専門家による野鳥の調査（鳥類相の把握）
- ・野鳥記録の公表（雑誌「バーダー」などに野鳥情報を掲載依頼）

２．バードウォッチャーとの連携（バードウォッチャーから情報を収集し、活用）
- ・観察記録の集約（観察後、館内にあるノートに記入）
- ・集まった記録の活用と発信（館内展示、ＨＰ、メールマガジン、鳥類相の把握など）
- ・周辺で撮影した野鳥写真の活用（写真展の開催など）

３．課題
- ・バードウォッチャーが必ずしもビジターセンターに立ち寄らない（立ち寄るメリットをＰＲできなかった）
- ・バードウォッチャーのグループの中だけで情報が共有され、ビジターセンターに届かない（希少種、繁殖情報など）
- ・バードウォッチャーとの協働した活動が不足（ゴミ拾いなど）
- ・野鳥撮影のため餌付けなどの問題が発生（マナー等の啓発が行き届かなかった）
- ・野鳥撮影のため繁殖に影響を与えかねない事例が発生

こうした事例を元に、皆さんとより良いネイチャーセンターを考えて行ければと考えています。

Cooperation between Nature Center and Birdwatcher

AOKI Yuji
Public Interest Incorporated Foundation, Kangawa Prefecture Park Association

Abstract

As an example of cooperation between nature center and birdwatcher, Miyagase Visitor Center, Kangawa Prefecture where my former stationed facility, is going to be introduced.

Miyagase Visitor Center located an artificial lakeside, Miyagase Lake, which was created by a dam construction in the mountains, open in 1986 and closed in 2016. Enabling to watch many birds of mountains and waterside all the year of four seasons because of the location of lake and mountain area and as one of the famous birdwatching sites in Knato area, this place attracted many birdwatchers.

However, this place had not been visited many birdwatchers from the beginning. I document process from the beginning and cooperation between them afterward, and summarize its issues.

1. The process until recognized as birdwatching site (fundamental data collection and PR)
・Researches of birds by staffs of the center and researchers (comprehension of avifauna)
・Publication of bird data (requested bird data publication, such as “Birder”)

2. Cooperation with birdwatchers (data collection from birdwatchers and application)
・Summarization of watching data (taking note in the facility, after watching)
・Application of the data and information transmission (display in the facility, HP, mail magazine, comprehension of avifauna, etc)
・Bird photos photographed around the center and its application (conduct of photo exhibitions)

3. Issues
・Not all of birdwatchers visit the facility (could not inform benefit of visitation)
・Sharing the data only among birdwatchers, but not arrive the center (the data of rear species, breeding information)
・Issue of feeding for photography (inadequate enlightement of manners)
・Issue of negative impact of photography to breeding

I hope that we can think about better nature center based on these matters.

沖縄の探鳥地施設の現状　海外・国内有名探鳥地との比較

神田君夫

やんばる自然写真工房

要　旨

海外探鳥地の施設について
コスタリカの有名探鳥地
モンテベルデ：保護区の環境と施設　代表的な野鳥（ケツァール）
ボカタパーダ：保護区の環境と施設　代表的な野鳥（ヒワコンゴウインコ、オオコンドル）
パロベルデ　：保護区の環境と施設　代表的な野鳥（アカハシリュウキュウガモ等の水鳥）

オーストラリアの探鳥地
カカドゥ国立公園など湿地の施設　そこに集まる野鳥たち

南アフリカの探鳥地
クルーガー国立公園内湿地の施設　そこに集まる野鳥や野生動物

国内探鳥地の施設について
北海道　根室市　野鳥観察舎　代表的な野鳥（タンチョウ、オオワシ、オジロワシ）
大阪　南港野鳥園の施設　そこに集まる野鳥たち（シギ、チドリ）
石川県　野鳥観察施設　河北潟、片野鴨池　そこに集まる野鳥たち（ガン、カモ）

沖縄県内の探鳥地の現状
漫湖　漫湖・水鳥湿地センター　代表的な野鳥（クロツラヘラサギ、シギ、チドリ）
三角池（豊見城遊水池）、豊崎干潟、具志干潟
代表的な野鳥（クロツラヘラサギ、シギ、チドリ）
比屋根湿地、泡瀬干潟　代表的な野鳥（シギ、チドリ）
やんばる国立公園　代表的な野鳥（ヤンバルクイナ、ノグチゲラ、ホントウアカヒゲ）

まとめ
沖縄県内探鳥地の施設づくりへの提言
やんばる国立公園の施設づくりへの提言

Current condition of Birdwatching Facilities in Okinawa; Comparison with the facilities in abroad and Japan

KADA Kimio
Yambaru Nature Photo studio

Abstract

Birding facilities in abroad
The famous birding sites in Cost Rica
Monteverde: conserved area and facilities; Quetzal, a representative bird
Boca Tapada: conserved area and facilities; Macaw, Andean Condor, representative birds
Palo Verde: conserved area and facilities; waterbirds such as Red-billed whistling duck

Birdwatching sites in Australia
Wetlands and facilities in Kakadu NP, birds flocked in these sites

Birdwatching sites in Africa
Wetlands and facilities in Kruger NP, birds flocked in these sites

Birdwatching sites in Japan
Birdwatching Hut, Nemuro City, Hokkaido; Japanese crane, Steller's sea eagle, White-tailed eagle, representative birds
Nako wild bird park facilities, Osaka, birds flocked in these sites
Kahoku-gata and Katano Duck Pond, wild bird watching facilities, Ishikawa Prefecture, birds flocked in these sites

Current condition of birding sites in Okinawa
Manko Waterbird and Wetland Center, Manko; Blackface spoonbill, Snip, Plover, representative birds
Triangle Pond, flood control basin, Toyosaki Wetland, Gushi Wetland; Blackface spoonbill, Snip, Plover, representative birds
Hiyago Wetland, Awase Tideland, Snip, Plover, representative birds
Yambaru NP, Okinawa rail, Okinawa woodpecker, Ryukyu Robin

Summary
Recommendations of establishing birdwatching facilities in Okinawa Prefecture
Recommendations of establishing facilities (birdwatching) in Yambaru NP

MEMO

MEMO

連絡先

新垣裕治
名桜大学国際学群教授
0908-51-1081
y.arakaki@meio-u.ac.jp

■資料②（チラシ・ポスター）

アジサシ類・バードウォチング in 恩納村

　ベニアジサシやエリグロアジサシ・コアジサシは、４月から８月にかけて沖縄で見ることのできるアジサシ類です。アジサシ類はカモメの仲間で、これらアジサシ類は、遠くオーストラリアや東南アジアから産卵・子育てのために沖縄まで飛んできます。沿岸を群で飛びまわり、急降下をして魚を捕まえる姿は沖縄の夏の風物詩の一つです。最近、屋我地地区で飛来数が減少しているとのことですが、毎年のように営巣場所を変える性質があり、他の場所では集団で営巣しているのを見ることが出来ます。

　今回、このアジサシ類の探鳥会（バードウォチング）を開催し、アジサシ類の特徴、沖縄の地理的・自然環境的な特徴等について理解を深め、アジサシ類の保護についても考えます。

日時：2016 年 7 月 30 日（土）
08：00－12：00
場所：瀬良垣魚港（恩納村）
※現地集合（右下図参照）
講師：嵩原健二氏
（沖縄野鳥研究会）

参加費無料

※できれば双眼鏡等はご持参下さい。
※午後は場所を変えてﾊﾞｰﾄﾞｳｫﾁﾝｸﾞを予定しています。希望者を歓迎します。

問合せ先：
新垣裕治（名桜大学国際学群教授）
メール：y.arakaki@meio-u.ac.jp
TEL：090-1179-0972

群れて魚を取るエリグロアジサシ（羽地内海）

抱卵中のエリグロアジサシ（本部町）

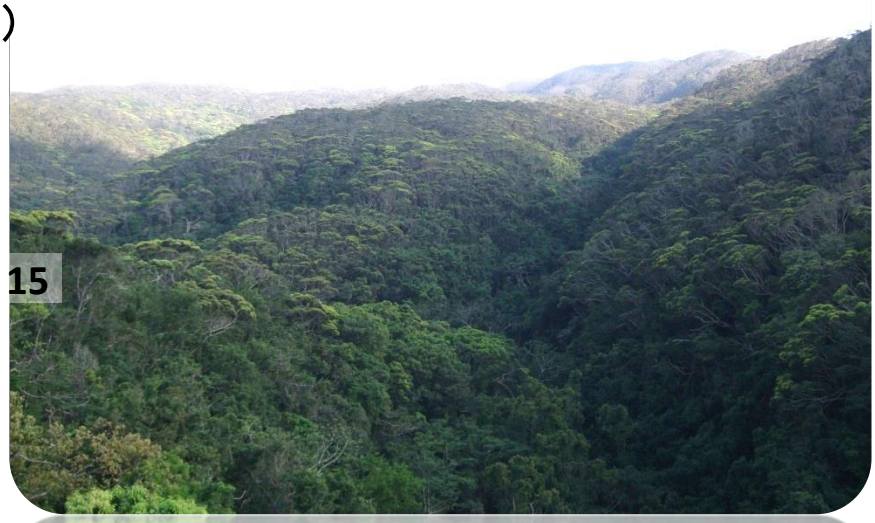
企画・手配：名桜大学国際学群新垣ゼミナール
「本イベントは、公益財団法人おきぎんふるさと振興基金（平成 28 年度）の助成を受けて実施されるものです」

第２回バードウォチング企画

「“やんばる”早朝バードウォチング・ バスツアー」

“やんばる”にはそこにしかいない生き物が多数生息しています。ヤンバルクイナ・ノグチゲラ・アカヒゲ等です。このツアーでは、生き物が活発に動き回る早朝に“やんばる”の森で野鳥観察等をすします。“やんばる”Only One体験を通し“やんばる”自然について考えます。

日時：H28/09/24（土）5：00－14：00
対象：一般・大学・小中高（小学生は大人同伴）
講師：嵩原健二（沖縄野鳥研究会）



スタート：05：00（5分前には集合！）
名桜大学バス停（本部棟横）
↓
為又バス停（白銀薬局前）05：05
↓ ※乗車は要連絡
名護十字路ﾊﾞｽ停（市営市場側）05：15
↓ ※乗車は要連絡
国頭村楚洲
↓ （早朝に採餌するﾔﾝﾊﾞﾙｸｲﾅ観察）
学びの森
↓ （朝食と休憩、ﾊﾞｰﾄﾞｳｫﾁﾝｸﾞ）
ヤンバルクイナ生態展示施設訪問（キョンキョンの朝の活動観察）
↓ ※入場料500円（個人負担）
ゆいゆい国頭（国頭村道の駅）（休憩と昼食）
↓
喜如嘉ターブックワ（もう、冬鳥が渡ってきています）
↓
名護十字路バス停・為又バス停
↓
名桜大学バス停14：00

催行最少人数：15人（定員26人）
参加費：500円（保険代等）
※帽子・タオル・歩きやすい格好双眼鏡等持参

申込み期限：H28/09/20（火）17：00 ※定員に達し次第〆切
問合せ：新垣裕治（名桜大学国際学群教授）
y.arakaki@meio-u.ac.jp TEL 090-1179-0972 FAX 51-1528
※出張（9/11-9/17）なのでメールでの連絡をお願いします。

企画・手配：名桜大学国際学群新垣研究室

※この活動はおきぎんふるさと振興基金（平成28年度）の支援を受けて実施されます

バードウォチングとエコツーリズム Ⅰ
～地域活性化と観光促進～

【プログラム】

基調講演
●江崎保男（兵庫県立大学大学院地域資源マネジメント研究科長・教授）
「コウノトリ野生復帰と地域の生物多様性復元」

事例報告/パネルディスカッション
●渡久地　豊（国指定屋我地鳥獣保護区管理員）
●村田　尚史（名護博物館学芸員）
●新垣　裕治（名桜大学国際学群教授）

●総合討論
・バードウォチングとは？エコツーリズムとは？
・沖縄のバードウォチング、地域活性化？/観光促進？
・自然環境の保全/復元の為には何をすべきか？
・等々、いろいろ議論をします。

日時：2016 年 9 月 24 日（土）
16：00―18：30
場所：大講義室 B
名桜大学学生会館 SAKURAUM（３階）

〈入場無料〉

※遠隔での配信もします。希望者は連絡を下さい（下記）。

連絡先：新垣裕治（名桜大学国際学群教授）
TEL0980-51-1081　FAX0980-52-4640
y.arakaki@meio-u.ac.jp

企画・手配：名桜大学国際学群新垣研究室
※この企画は、「公益財団法人おきぎんふるさと振興基金」（平成 28 年度）の助成を得て実施されます。

第３回バードウォチング企画

「湿地・冬鳥バードウォチング・バスツアー」

沖縄では冬に多く野鳥を観察することができます。その多くは渡り鳥（冬鳥）です。湿地や干潟に行けば、シギ・チドリ、サギ類等を多く見ることがでます。冬のバードウォチングで“やんばる”“沖縄”の新たな魅力が発見できます！！

日時：H28/12/18（日）08：30－15：00
対象：一般・大学・小中高（小学生は大人同伴）
講師：嵩原健二（沖縄野鳥研究会）/
渡久地　豊（国指定屋我地鳥獣保護区管理員）

スタート：08：30（5分前には集合！）
名桜大学バス停（本部棟横）
↓
為又バス停（白銀薬局前）08：35
↓　※乗車は要連絡
名護十字路ﾊﾞｽ停（市営市場側）08：45
↓　※乗車は要連絡
金武町（億首川水田等）
↓
泡瀬干潟周辺等＊
↓
その他（主要な探鳥場所等）＊
↓
名護十字路バス停・為又バス停
↓
名桜大学バス停15：00

＊当日の状況等により変化の可能性あり

弁当持参下さい！！

催行最少人数：15人（定員26人）
参加費：500円（保険代等）小・中高生は無料
※帽子・タオル・歩きやすい格好
双眼鏡等持参

申込み期限：H28/12/14（水）17：00　※定員に達し次第〆切
問合せ：新垣裕治（名桜大学国際学群教授）
y.arakaki@meio-u.ac.jp　TEL 090-1179-0972 FAX 51-1528
※学外の事が多いのでメールでの連絡をお願いします。

企画・手配：名桜大学国際学群新垣研究室

※この活動はおきぎんふるさと振興基金（平成28年度）の支援を受けて実施されます

バードウォチングとエコツーリズム Ⅱ
～バードウォチング施設について考える～

【プログラム】

事例報告
- ●Mr. Gawin Chutima（タイ鳥類保護協会）
- ●青木雄司（公益財団法人 神奈川県立公園協会）
- ●神田君夫（やんばる自然写真工房）

総合討論
- ・県外や海外でのバードウォチング施設整備状況は？
- ・沖縄のバードウォチング施設整備状況は？
- ・沖縄のバードウォチング、地域活性化？/観光促進？
- ・自然環境の保全、環境教育の為には何をすべきか？
- ・等々、いろいろ議論をします。

日時：2016 年 12 月 19 日（月）
17：00－19：30
場所：大講義室 B
名桜大学学生会館 SAKURAUM（３階）

〈入場無料〉

※遠隔での配信もします。希望者は連絡を下さい（下記）。

連絡先：新垣裕治（名桜大学国際学群教授）
TEL0980-51-1081　FAX0980-52-4640
y.arakaki@meio-u.ac.jp

企画・手配：名桜大学国際学群新垣研究室
※この企画は、「公益財団法人おきぎんふるさと振興基金」（平成 28 年度）の助成を得て実施されます。

■資料③（新聞等）

アジサシ群舞に歓声

獲物狙い滑空 懸命子育て

恩納で観察会

【恩納】渡り鳥のアジサシの観察会が7月30日、恩納村の瀬良垣漁港周辺で開かれた。10人の参加者はオーストラリアから渡ってきたベニアジサシの約100羽の群れが海面上で餌を捕る様子に「きれい」「すごい」などと歓声を上げた。

望遠鏡でアジサシを観察する参加者ら＝7月30日、恩納村の瀬良垣漁港周辺

ひなの待つ巣に餌を運ぶエリグロアジサシ＝7月30日午前8時半すぎ

名桜大国際学群の新垣裕治教授のゼミナール主催。

エリグロアジサシも10羽ほどの営巣が確認できた。案内した沖縄野鳥研究会の嵩原健二さん(61)によると、両アジサシの中では既に子育てを終えて移動した個体もいたり、営巣地点が昨年とは異なったりしていたが、例年通りの数という。

両アジサシとも環境省レッドリストの絶滅危惧Ⅱ類に指定される。嵩原さんは「青い海に白いアジサシは夏の風物詩と言ってもいい。子育て中なので近づかずに温かく見守ってほしい」と呼び掛けた。

名護市から参加した主婦の大浦和枝さん(42)は「見ていると引き込む力があり、こういう自然は財産だ」と話し、双眼鏡をのぞき込んでベニアジサシの動きを観察した。

観察会は自然保護をテーマにし、おきぎんふるさと振興基金の助成を受け、9月中旬には名桜大で観察会とエコツーリズムのシンポジウムを予定している。

2016/8/9（火）琉球新報 33 面

沖縄芝居公演 宜野座で11日

敬老の日で

「敬老の日に贈る沖縄芝居特別公演」が11日、宜野座村文化センターがらまんホールで開かれる。演目は午後1時から「奥山の牡丹」、午後6時から「伊江島ハンドー小」。チケットは前売り2500円、昼夜共通3500円（当日500円増）。問い合わせはがらまんホール事務局、電話098(988)2613。

24日に鳥シンポ 名桜学生会館で

ウオッチングも

【北部】名桜大の新垣裕治教授研究室は24日午後4時から、学生会館SAKURAUMでバードウオッチングをテーマにしたシンポジウムを開く。コウノトリの野生復帰に関わる兵庫県立大大学院の江崎保男教授を招き、沖縄の希少種の保全も討論する。入場無料。

これに先立ち早朝バスツアーを開催。午前5時に名桜大に集合し、午後2時までやんばるの森でヤンバルクイナやノグチゲラを観察する。参加費は保険料を含む500円。

新垣教授は「バードウオッチングが環境学習と地域振興の起爆剤になれるよう取り組みたい」と話した。問い合わせは新垣教授、メール y.arakaki@meio-u.ac.jp

シンポジウムとバスツアーへの参加を呼び掛ける新垣裕治教授＝沖縄タイムス北部支社

きいやま商店「農園ライブ」

11月 石垣の八島小

【石垣】市在住の兄弟いとこバンド「きいやま商店」＝写真＝の約3年ぶり5回目となる「きいやま農園ライブ」が11月19日、八島小学校（宮良永秀校長）グラウンド特設ステージである。「子どもたちに音楽を身近に感じてほしい」と企画したメンバーが8月30日、同校で来場を呼び掛けた。

メンバーのリョーサ、だいちゃん、マストは「子どもたちが島の音楽を始めるきっかけになれば」と期待。

前売りチケットは10月1日から販売予定。大人2千円、高校生以下500円（小学生以下は無料）。問い合わせはメール、info@kiyamanouen.net

2016/9/8（木）沖縄タイムス 19 面

冬の野鳥観察 あすバスツアー

名桜大、19日はシンポ

【名護】名桜大学国際学群・観光産業専攻の新垣裕治教授は18日、「湿地・冬鳥バードウオッチング・バスツアー」を行う。バスツアーは午前8時25分に名桜大学バス停に集合。金武町億首川周辺の水田など県内の湿地でシギ、チドリ、サギなどの野鳥を観察する。帽子、タオル、双眼鏡などは持参。参加費500円（小中高生は無料）。定員に達し次第締め切りで事前申し込みが必要。

19日には午後5時から名桜大学学生会館3階大講義室Bで、シンポジウム「バードウオッチングとエコツーリズムⅡ～バードウオッチング施設について考える～」を開く。

新垣教授は12日、琉球新報北部支社を訪れ「多くの方に参加してほしい」と呼び掛けた。

バスツアーの申し込みは新垣教授 y.arakaki@meio-u.ac.jp ☎0980(51)1081。

バスツアーとシンポジウムへの参加を呼び掛ける名桜大学国際学群・観光産業専攻の新垣裕治教授＝名護市の琉球新報北部支社

2016/12/17（土）琉球新報 27 面

バードウォッチングとエコツーリズムⅡ
～バードウォッチング施設について考える～

問 名桜大学 国際学群 新垣研究室
☎ 090-1179-0972（担当：新垣）
✉ y.arakaki@meio-u.ac.jp

国内外の自然公園においてバードウォッチング施設整備の現状を概観し、沖縄の現状と課題について考えるシンポジウムです。

日時 12月19日（月） 午後5時30分～午後8時
場所 名桜大学サクラウム3階 大教室B
講師 Gawin Chutima（元タイ鳥類保護協会）青木 雄司（神奈川県公園協会）神田 君夫（やんばる自然写真工房）
対象者 自然体験指導者・公園整備に関わる役所職員・一般
聴講 無料

◉湿地・冬鳥バードウォッチング・バスツアー

日時 12月18日（日） 午前8時30分～午後3時（弁当持参）
集合場所 名桜大学バス停
参加費 500円（保険代など）
※小・中・高生無料
対象者 小学生以上（小学生は大人同伴）

市民のひろば（名護市広報誌）2016年12号27頁

んふるさと振興基金（理事長・玉城義昭沖銀頭取）の2016年度助成認証式を那覇市の同行本店で開き、8団体、1個人に総額500万円を助成した。玉城理事長は「（沖銀の）創立60周年という記念すべき節目に皆さんに助成金を交付したことは大変有意義なことだ。皆さまの未来に向けて後押ししたい」と話した。今回を含め助成金総額は1億6220万円となった。

助成先は次の通り。（敬称略）

レオン・セラフィム▽屋部支所管内地域振興会▽染織工房バナナネシア▽バリアフリーネットワーク会議▽OIST人材多様化セクション▽げんき村▽新垣裕治▽伝統木造技術と親泊次郎展実行委員会▽SOCKS

おきぎんふるさと振興基金の助成を受けた団体の代表者ら＝8日、沖縄銀行本店

2016/7/9（土）琉球新報 5 面

おきぎんふるさと振興基金から助成金が贈呈される

平成28年7月8日（金）、国際学群観光産業教育研究学系の新垣裕治教授に対し、公益財団法人おきぎんふるさと振興基金（理事長・玉城義昭 株式会社沖縄銀行頭取）から助成金が贈呈されました。

新垣教授はこれまで、主にバードウォッチングに関するシンポジウムの開催を通して、自然環境への意識を高める活動を行ってきました。今回、助成対象となったテーマは「バードウォッチングを通した環境教育と地域活性化」で、この取り組みでは、3回のバードウォッチングの開催及び2回のシンポジウムの開催が予定されています。

7月20日（水）、新垣教授が公益財団法人おきぎんふるさと振興基金*（理事長・玉城義昭 株式会社沖縄銀行頭取）から助成を受けたことについて山里勝己学長に報告しました。

山里学長は「この度は、おきぎんふるさと振興基金の認定、おめでとうございます。新垣先生の長年の功績が広く認められたものと思います。これから、シンポジウム等も控えていると思いますが、研究成果を広く認知させることで、日々の研究活動に対して益々励んでいただきたい」と期待を寄せました。

*（公財）おきぎんふるさと振興基金は、株式会社沖縄銀行の社会貢献活動の柱の一つとして、健康・環境・教育・福祉・文化など様々な分野において沖縄の振興に貢献する方々を支援する目的で設立され、将来性があると判断される個人、団体、企業等に対して助成を行っています。

山里学長（左）へ報告した新垣教授（右）

Meio（名桜大学広報誌）2016 年 9 月号 15 頁

作　成
新垣裕治
名桜大学国際学群教授
0908-51-1081
y.arakaki@meio-u.ac.jp